

布教 羅針盤

法然上人の
立教開宗以後の
あゆみ

ふきようれしんばん

令和
6年度



開宗850年を
迎えて（後篇）
必読の一冊

教諭

浄土門主

伊藤唯眞 猊下

学びを深めるために

藤本浄彦 台下

布教講義

大門俊正

布教実例

日野崇雄

戸崎博隆

羽田龍也

早田空善

監修

教育学事審議会
布教専門部会



法然上人
浄土宗
開宗850年
記念碑から始まる幸せ
令和6年

令和六年度 布教羅針盤

開宗850年を迎えて
(後篇)

〔法然上人の立教開宗以後のあゆみ〕

◎目次◎

教諭……………浄土門主 伊藤唯眞猥下 8

はしがき……………浄土宗宗務総長 川中光教 18

第1章 布教講義

求め、願い、そしてあこがれて行く

……………福井教区 善導寺 大門俊正 24

第2章 布教実例

凡夫のためのお念仏

……… 山形教区 浄土院 日野崇雄 44

俱会一処を願いて

……… 静岡教区 報土寺 戸崎博隆 54

弥陀呼ぶ声に包まれて

……… 京都教区 大善寺 羽田龍也 62

お念仏生活を身につけよう

……… 佐賀教区 光明寺 早田空善 72

第3章 学びを深めるために

開宗八百五十年―法然上人の立教開宗以後の布教・教化 立教開宗後の法然上人

……… 大本山金戒光明寺 法主 藤本淨彦 台下 82

あとがき……… 教育学事審議会布教専門部会 部会長 池田常臣 116

凡 例

典拠を示すにあたっては次の略号を用いる場合がある。書名のあとの数字は、巻数および頁数を示す。

- 聖典……浄土宗聖典（浄土宗）
- 昭法全……昭和新修法然上人全集（平楽寺書店）
- 浄全……浄土宗全書（山喜房仏書林）
- 御法語……平成新版元祖大師御法語 前篇・後篇（知恩院）
- 法伝全……法然上人伝全集（法然上人伝全集刊行会）
- 大正藏……大正新脩大藏經（大正一切経刊行会）

なお引用文は、原則として漢文は書き下し文に、旧字・旧仮名づかいは、新字・現代仮名づかいにあらためたほか、適宜ルビ等を付した。

教諭

法然上人の生涯は「念仏に至る」求道の前半生と、「念仏に生き
た」教化の後半生とに分かれます。その分岐点が、善導大師の釈義
によって弥陀本願に相応した念仏行に独り立ちの価値を悟得された、
かの承安五年であります。

これより上人は、直ちに余行を止めて念仏一行に帰されたのでし
たが、間もなく治承の内乱が生じ、世の中は源平の争乱に巻き込ま
れました。

そのなかを諸経論の研究に専念されていた上人でしたが、木曾義
仲が京に乱入した日だけでできなかったと嘆かれたのは、その三年後
のことでした。

しかしこの騒乱のなかでも上人は、浄土三部經典や浄土諸師の論
書の研鑽を一段と続けられ、救済者である弥陀の聖意をその本願に

窺うとともに、称名の行があらゆる凡夫に適った勝行であることを論証しようとなされました。法然上人の心底には、凡夫の我らが誰ひとり漏れることなく往生できるのは浄土の法門を除いて他にはない、との強い信念が存在していたからです。

このような時、平家滅亡後の苛烈な残党狩りが終わろうとする文治二年に、大原隠栖中の顕真法印との論談がありました。この「大原問答」が、弥陀の本願力を仰ぎ凡夫の往生を力説された法然上人の存在をひろく世間に知らしめる契機となりました。かくして上人の名は諸宗・貴紳の間に広がり、彼らはその教説に関心を持ったのです。

その三年後の文治五年八月、上人は九条兼実邸に招かれ、法文を語り「往生業」を談じあいました。それは兼実の長男良通（内大

臣)がその前年に頓死したのを悲しみ、その悲嘆から逃れる為の聴聞でしたが、上人と出会ってから七日後に兼実を受戒し、また恒例念仏を始めるのを例としました(『玉葉』)。このような法然上人への帰信が、後年、兼実をしてかの『選択集』述作を上人に慫慂せしめたのでした。

法然上人と兼実の道交が進展するなか、上人は東大寺の勸進ひじり重源の要請を受け、南都でも淨土三部經を講じ、新視角からの口称念仏の卓越性を強調されました。文治六年二月のことです。『阿彌陀經釈』『觀無量壽經釈』には奥書がありますが、『無量壽經釈』にはそれがみられません。しかし『法然上人行狀繪圖』卷三〇には、建久二年のころ淨土三部經を講じられたと伝えてありますので、『無量壽經釈』が成つたのも東大寺講席が持たれたのも、文治・建久の

交に在ったと考えてよいでしょう。「東大寺十問答」も建久二年三月のもので前年にも上人と重源の間答があったようです。また安樂房遵西の父・外記入道師秀が催した逆修法会への上人の説法があったのも建久五年との説があります。

右に出た上人の釈書、問答、説法などは、上人の回心後十數年を経、『選択集』の成立に程なく近づくといった頃合いです。まさに「世ノカワリノ継目」（『愚管抄』）であればこそ、乱世に苦惱する人々に対し、口称念仏こそが弥陀の本願にかなって誰彼なくひとしく極樂に往生できるといふ釈迦のお勧めを、上人はその根柢を経証に求めて、それを勸説せざるを得なかったのです。

こうして成った『無量寿経釈』ですが、この講述にはすでに法然教學に特徴的な「選択」の語が用いられています。『無量寿経』の

異訳『大阿彌陀經』に「選択」の語があるのを引き「この中の選択とは、即ちこれ取捨の義なり」と述べられて、例として第十八願念佛往生願について、「布施持戒乃至孝養父母等の諸行を選捨して専称仏号を選取す。故に選択すと云うなり」と説かれます。そして、なぜ十八願に一切の諸行を選捨して念佛の一行のみが選取されたのかと自問し、「聖意測り難し」としながらも勝劣・難行の二義を以て仏意を窺う『無量壽經釈』の文章が続きます。

『無量壽經釈』の「入文解釈」に入ってから記述は少し長いのですが、それらが『選択集』第三章の私釈段に全文記載されています。私釈段では途中に『往生礼讚』『往生要集』の要文が挿入されていますが、その直後には造像起塔・智慧高才・多聞多見・持戒持律をもって本願とされたなら、貧窮困乏・愚鈍下智・少聞少見・破

戒無戒の人は定めて往生の望みを断ち、世の中には貧窮・愚痴・少聞・破戒の者で溢れているのだ、という上人の社会認識が特記されています。

この点『無量寿経釈』では、右に相当する部分を要略左記しますと、次の通りです。

もし布施を別願とすれば貧窮の人は生ぜず、起塔を別願とすれば往生できるのは阿育王のみで困乏の者は往生できない。稽古鑽仰が別願となれば訪生光基らは生じて寡聞狭劣者は適わない。もし貴家尊宿が別願ならば一人三公は往生できるが万民百庶は得生できない。しかるに今、念仏往生の本願は有智無智を選ばず。持戒破戒を嫌わず。少聞少見を云わず、一切心有るの者、となえ易く生じ易い。

両者を対比しますと、大旨は通じていますが、構文、例文語句等にかんがりの相違があり、『選択集』の方に洗練さが多分に認められます。この後に続く箇所、すなわち「聖意難測」（勝劣難易二義）の部分には両書等しく記述されてはいますが、『無量寿経釈』では他事項が続くのです。『選択集』には、先稿の『無量寿経釈』が必要に応じて再録されていて、上人の思想展開上に必要な地位を占める経釈だと言わざるを得ません。

法然上人のご生涯中、この文治・建久の間は五十歳半ばからの十余年間に相当し、淨土宗の教団形成が確実に推進した時期であります。この間の著述、説法にも宗の相承血脈が説示されています。念仏に心を寄せるもの、正に一人三公すなわち後白河院はじめ九条兼実などから、下は都鄙衆庶まで及び、入室の弟子、去来する念仏ひ

じりが着実に増えたのもこの時期です。上人が諸寺の別所聖、非官僧と積極的に接点をもった時期でした。達磨宗を立てようとした大日能忍や宗西とも名を連ねた上人の一行一筆結縁經（愛知 西光寺）が近時知られ、上人の『無量寿經釈』にも「達磨宗」の名称が出ています。宗教界に新風が吹こうとする時節だったのです。

そのような時、かの兼実一族は高貴を極めても安泰ではなかったのです。建久七年暮、兼実は関白を罷ていました。上人との面謁も希になったので、「往生の信心を増進せしめんが為、抄物を記して賜うべし」との仰せが、上人に代って参上した証空に有ったのです（『選択密要決』）。時に建久九年三月、上人六十五歳の春。真観（感西）が法文義を談じ、証空が経釈要文を引き安樂・（遵西）が執筆したという（同上）。親鸞も「禅定博陸 月輪殿兼実 法名円照の教

命により撰集せしむ所なり」と『教行信証』後序で述べています。

かくして『選択本願念仏集』は成りました。その後序において、『観経疏』と出会ってよりの感興を述べる段で、法然上人は念仏の教が現に興隆したことについて、次の通り特記しておられます。「浄土の教、時機を叩いて行運に当れり。念仏の行、水月を感じて、昇降を得たり」と。

船の渡し場を問う者には西方極樂浄土への渡し場を教え、行を尋ねる者には念仏を示しました。だから浄土の教は、今の私らの器と適合し、興隆する巡り合せに当たったのです。念仏の行は、月が地上の水面に映えているように、地上の凡夫が彼方にまします仏と感応し合えるのを可能にして下さったのです。念仏こそが凡愚のわれらを仏に結ばせたのです。念仏がもつ尊さに思いを深くし、「念仏に

生きた」上人の後半生を閉じるに当り、上人の名句「念仏之行、感水月得昇降」を念仏者は共々に銘じておきたいものです。

令和六年一月一日

浄土門主 伊藤唯真

はしがき

世界に誇る日本を代表する企業グループトヨタ自動車には「カイゼン」という取り組みがあることは有名です。海外でも「Kaizen」として認知されています。我々はつい「改善」でしょう。と勝手に漢字変換をしまいがちですが「カイゼン」と「改善」は別ものです。「改善」は悪い部分を改めて良くするという意味があり、明確な課題を解消することが目的。一方の「カイゼン」は現状に満足せずもつと良くするという意味があります。悪いことも良いことももつと良くするにはどうしたらいいか。経営者も管理職も現場の労働者も一緒になってチャレンジする積極的なボトムアップの活動です。トヨタ式カイゼンは製造業に留まらず様々な業種に広まりイノベーションを起こしています。

「現状維持は後退のはじまり」福沢諭吉も松下幸之助もウォルトディズニーも野村克也も、多くの偉人と言われる人々が同様の言葉を残しています。立ち止まった瞬間から衰退がはじまる。行動を求められるような、恐怖を感じるような言葉です。

念仏の元祖である法然上人は、人々にお念仏の救いの道を示してくださいました。暗

黒の世の中に光の道を示してくださいました。末法の世において全ての人々を包み込むような優しさを持っておられた方でもありました。一方で時代を見つめた改革者でもあり、人々に阿弥陀仏信仰を説き、念仏の行を勧奨される姿には厳しさも垣間見えます。当時の「カイゼン」の人であり、歩みを決して止めなかった人でありました。

浄土宗は開宗八五〇年を迎えました。有難いことだ。めでたいことだ。記念に何かをしなくては。と時機を高めることは重要ですし、浄土宗としてもこの数年は目標として掲げてまいりました。しかし正当した現在からは次の目標を見定めて活動・運動をしなければならぬ。近ければ善導大師の二三五〇年遠忌、遠くには法然上人八五〇年遠忌、開宗九〇〇年。

私は一つの危機感を持っています。開宗九〇〇年に浄土宗は存続しているのだろうか。さらに先、開宗千年に念仏の教えは伝わっているのだろうか。皆さまはどう思われますか。未来のことは誰にも分かりませんが、当然現世でその様子を確認することはできませんが、もし末法万年に残ると言われた念仏の教えが途絶えるようなことがあるとするならば、それは未来の誰かの責任ではなく、今を生きる私たちの責任なのだと思います。私は自身を含めて皆さんに問い続けたい。法然上人の残してくださいましたみ教えに胡坐をかいていないか。檀信徒の支えに甘えていないか。法を伝えているか。念仏を勧めてい

るか。他人を幸せに導こうとしているか。苦しみから救おうとしているか。法然上人のみ教えは人々を無理やり行動させるものではない。しかし仏弟子であり、法然上人の弟子である我々僧侶は歩みを止めてはならない。「カイゼン」を追い求めなければいけないのです。

浄土宗開教振興協会が発行する会報「開教」には、海外国内の各開教区・開教地の取り組みが紹介されています。読み解くと各地によって差はあるものの、従来の檀家制度が強く確立していない地での活動が如何に困難であるかがわかります。例えば国内開教使として、沖縄に新たな寺院を開創した開教使がおられます。茨城県出身の上人が元々琉球王国であった沖縄での布教について語っておられます。祖先崇拜が盛んといえども、仏教や宗派というものに対する認識が深くない人々に法然上人・口称念仏を伝える難しさ。「うちなあんちゅう」の同郷意識といわゆる余所者であるご自身との距離。何度も挫けそうなかで、前職であるダイビングインストラクターの経験を活かし、目の動きや言葉の発し方などから相手の気持ちを読み取り接することでまずは信頼関係を結び、後から時間をかけて法然上人のみ教えを伝えていくという布教スタイルの確立へと、皆さまなりのやり方を伝えてくださいました。0を1にするご苦勞をひしひしと感じますとともに、1になった時の喜びはどのようなものであろうかと想像を膨らみますのでありま

す。

さて突然ですが、マクドナルドやスターバックスにいる若者を思い浮かべてください。その若者に念仏を伝えなければいけないとして、どのように伝えますでしょうか。といいますが、私も恥ずかしながら、私の孫たちが大好きでよく通っているからであります。世間一般でも同様でありましょう。開宗九〇〇年。私共団塊の世代はとうにおりません。現在浄土宗の中核を担う40〜60代の諸上人も大多数の方は現世にはおられませんね。50年後に我々の立場を担うのは現在の若者たちです。時間がかかっても構いません。さあ、どうやって布教しましょうか。どうやって伝えていきましょうか。ともに智慧を出し合って「カイゼン」してまいります。

合掌

令和六年四月

浄土宗宗務総長 川中光教

◎第1章◎

布教講義

求め、願い、そしてあこがれて行く

福井教区 善導寺 大門 俊正

はじめに

令和六年（二〇二四）、いよいよ浄土宗開宗八百五十年の記念すべき年を迎えます。

法然上人は四十三歳のとき、「われ浄土宗をたつる心は、凡夫の報土に生まれることを示さんがためなり」と、高らかに称名念仏の教えを宣言されました。爾来、ここに八百五十年という長い年月を経て今に至っているわけですが、はたしてそのお念仏の教えが現代の人々にとって信ずるに足るそれになっているかどうか。私たち浄土宗教師たる者、それぞれの立場で、それぞれのやり方で念仏教化に励むことは当然の責務ですが、どのように法を説き教えを伝えるかを、今一度この記念すべき年に考察するべきではないでしょうか。

現代人の念仏理解

それにはまず、各寺の檀信徒、さらにはもっと範囲を広げて世間一般の人たちがお念仏の教えをどのように、どの程度理解しているかを把握しておくべきです。

世間一般では今はもう「天国」が当たり前になっています。「極楽」「浄土」などという語は死語と言っている状態です。「往生」は、行き詰まること、困ったことの意で世間に定着しています。

個人的なことでもまことに恐縮ですが、私は次のような経験をしたことがあります。

ある時、一人の女性から「ああそうですか。南無阿弥陀仏ってそういう意味なんですか。生まれて初めて聞きました」と言われました。私は年忌法事のおり、短い法話を心がけてしています。が、「南無阿弥陀仏とは、阿弥陀仏という仏さまに南無することですよ。南無とは、帰命・帰依という意味。だから南無阿弥陀仏とは、阿弥陀さまどうぞよろしくお願ひしますということですよ」という程度のことを、法話全体の最後に付け加えるという感じでお話しました。

この女性は決して無知蒙昧でも常識外れの人でもありません。むしろ、私の拙い話をしっ

かりと聞いて理解し、しかも正直な感想を述べてくれたのです（法話のあと、全く反応のないことほど残念なことはありません）。拙寺の檀家に生まれ浄土真宗を菩提寺とする家に嫁ぎ、実母の年忌法要にお参りした、ごく普通のまさに一般的な中年婦人です。嫁に行く前の段階で拙寺の教化が行き届いていなかったということはあったとしても（若い時だから積極的にのお寺へ参る機会もなかったでしょう）、真宗の盛んな私の地方ですから当然「南無阿彌陀仏」が何を意味するかぐらいは分かっていると、それこそ私は思い込んでいたので、「南無阿彌陀仏ってそういう意味なんですか。生まれて初めて聞きました」という反応がまことにショックだったわけです。

ついでもう一つ、私がビックリした経験を書き加えます。浄土宗の大事な年中行事の一つにお十夜があり、もちろん我が寺も毎年勤めています。周囲の真宗寺院の報恩講が季節的に同じころに勤められることもあり、年中行事としてはいちばん盛大な法要でもあるので、檀信徒に境内の掃除などいろんなお手伝いをしてもらいます。そこで、寺の和尚さんと、あるいは和尚の奥さんと檀信徒のいろんな交流ができる良い機会でもあります。

師父も健在でまだ私が若いころ、本堂の掃除並びに莊嚴を整えていた時、ある壮年男性が、「この仏さんはお釈迦さんですね？」と私に質問、というより確認でしょうか、そう話しか

けてきました。

多分、年寄りの住職さんに聞いて間違っていたら怒られると思ったのか、この若い和尚ならもしかして間違っていないでも許されるだろうと考えたのでしょうか。もちろん私は、「いや違いますよ。この仏さまは阿弥陀さま、阿弥陀仏。あなたの家のお仏壇の本尊さまと同じ阿弥陀さまですよ」と返答しましたが、ああそうか、普通の人（本宗なら五重相伝を受けていない人）ならお釈迦さんも阿弥陀さんもちょっと見には同じに見えて当たり前なんだな、と思いました。

それはちよつと極端すぎるだろうと思われるかもしれませんが、あるいは、私の普段の教化が不十分なだけかもしれません。ですが、檀信徒さらには一般世間の人々と、私たち浄土宗教師の間に乖離するものがないかどうか、深い溝がありはしないかどうか、しっかりと確認した上での教化活動が必要ではないでしょうか。「南無阿弥陀仏」が何を意味するか分からない人もいるし、阿弥陀さまとお釈迦さまを混同している人もいるという前提で教えを説く必要があると考えます。

拝み、帰依する仏の名は「阿弥陀仏」であり、その名をとなえて私たちは阿弥陀さまの極楽に生れて往く、と能化の私たちは当たり前前のことと思っていることが、多分、普通の人に

は、まったくとは言わなくともかなり誤解されている。「極楽」や「往生」という、私たち浄土宗侶には自明の言葉も、一般人には正しく理解されていないのではないか。そのような前提の上で、今一度そういう重要な言語を丁寧に分かりやすく人々に説くことから始めるべきではないでしょうか。

奈良岡朋子さんの「お別れのコメント」

前章でははなはだ悲観的というか、一般檀信徒と浄土宗教師の齟齬の深さを書きましたが、いやいや世の中そんな悲観するばかりじゃないぞ、という新聞記事がありました。

開宗八百五十年お待ち受けの昨年、令和五年三月二十三日、劇団民芸代表、俳優、奈良岡朋子さんが九十三歳で死去、というニュースが三月三十日の新聞に報道されました。私は地元の『福井新聞』で読みました。奈良岡朋子さんの姪にあたる方が遺品を整理していたところ、亡くなる一週間ほど前に書いたと思われるメモがあったそうです。その内容たるもの、まことに素晴らしい、明るい、前向きな、そして楽しいことが書かれていたのです。

念のため奈良岡朋子さんのことを紹介しておきますと、俳優であり、劇団民芸の代表をつ

とめていました。若い時に演出家宇野重吉に師事、劇団民芸に入り舞台俳優として活躍しました。晩年は主に井伏鱒二の小説『黒い雨』を舞台上で朗読する一人舞台を、「役者人生終幕のライフワーク」としていました。

以下に「奈良岡朋子さんが生前に残したお別れのコメント」と題した一文を『福井新聞』から引用します。

新たな旅が始まりました。旅好きの私のことです、未知の世界への旅立ちは何やら心が弾みます。

向こうへ着いたらすぐに宇野（重吉）さんを訪ねます。もう一度あの厳しい演出を受けたいと長い間願ってきました。でもね、宇野さん、私はあなたよりずっと長く生きて経験を積んできましたからね、昔のデコじゃないですよ。「デコ、お前ちつとましになつたな」と言われたくてこれまで頑張ってきたんですから。腕が鳴ります。杉村（春子）先生とももう一度同じ舞台を踏みたかった。どんな役でもいいから一緒にしたい。ワクワクします。

両親に挨拶するのは二、三本舞台をやって少し落ち着いてからにします。それからは裕

ちゃん（石原裕次郎さん）や和枝さん（美空ひばりさん）と思いつき遊びます。

これが別れではないですよ。いつかはまたお会いできますからね。それでは一足お先に失礼します。皆さまはどうぞごゆっくり……。

推測するに、この「お別れのコメント」には特定の宗教、宗派を表す語が一つも使われていないから、このように新聞に公表されたと思われます。また、奈良岡朋子さん自身も何特定の宗教を信仰していたということもなかったようです。

つまり、まったく宗教に縁がなかったと思われるごく一般人が、自分の死を「新たな旅」「未知の世界への旅立ち」と、捉えているのです。しかも、奈良岡朋子さんの死因は肺炎だとありましたから、おそらくそう遠くないうちに死を迎えるだろうと自分で分かっていたはずです。そのような人が、死をちっとも怖がらず、「旅好きの私のこと」だから「何やら心が弾みます」と、楽しく嬉しいこととして書いているのです。死んだらシマイ、何にもないなどとはまったくつゆほどにも思っていないのです。

しかも、「向こう」で、師匠格の宇野重吉さん、先輩、友人たちと再会できることを心から楽しみにしているのです。この世でいろいろ指導してもらった宇野重吉さんに対して、

「デコ、お前ちつとましになつたな」と褒めてもらいたいというのですから、まさに役者魂といふか、もつともつと演技が上手になりたいといふ、あくなき向上心に驚かされます。いや、驚くというより感動するものがあります。

そして、そのあと「両親に挨拶する」と、大恩ある両親のことを決して忘れていないこと、なんとも微笑ましいものがあります。ちよつと調べた所によりますと、奈良岡朋子さんのお父さんは有名な洋画家です。美術の大学を卒業した娘の朋子さんに、今後の進路についてなにかとアドバイスをしたようです。最終的に彼女は女優になることにしたのですが、そのようにいろいろお世話になつたことを思い出したのでしょうか、両親のことを忘れていないことに、心安らぐものがあります。

最後の「これが別れではないですよ。いつかはまたお会いできますからね。それでは一足お先に失礼します。」が、また素晴らしいですね。今私が「向こう」へ行つたら、先に「向こう」に着いている人と懐かしい再会ができることを確信しているのです。しかも、後からやってくる人たちに対しては、「これがお別れではないですよ」「いつかはまたお会いできますから」と、余裕綽々、心乱れずという心境に驚かされます。

法然上人のご法語に「会者定離は常の習い、今はじめたるにあらず。何ぞ深く嘆かんや。宿縁空しからずば同一蓮に坐せん。浄土の再会はなだ近きにある。今の別れは暫くの悲しみ、春の夜の夢のごとし（『平成新版元祖大師御法語後篇』一〇八頁）」というお言葉があります。

法然上人にもお念仏にも全く縁のないと思われる奈良岡朋子さんは、前記の「お別れのコメント」を読むかぎり、間違いなく「浄土の再会」を信じ、「今の別れは暫くの悲しみ」であり、「春の夜の夢」のようなものだとは確信していたのです。だから、「皆さまはどうぞごゆつくり…」などと余裕を持って自分の死を迎えることができました。先に「向こう」に行った先輩や友人たちについて必ず「向こう」の世界で会えるという強い気持ちがあればこそ、役者として俳優としての向上心の炎を燃やし続け、九十三歳までの人生を力強く生き抜くことができたのです。

お念仏は何のためになえるのか

法然上人は、お念仏のご縁により私たちはかならず極楽の蓮の中に生まれ、そしてそこで

懐かしい、先立った人との「浄土の再会」がありますよ、とお説きになっていきます。つまり、お念仏をとなえることにより、「浄土の再会」が間違いないものになり、この世の別れなどは「春の夜の夢」のようなものであり、今の別れをいたずらに嘆くことはない、とのお示しです。

そのような内容を、浄土宗となんの関わりもない奈良岡朋子という人が確信していたわけですが、それはつまり、一般の人々にも私たち浄土宗の者が生まれて往くことを願ってやまない「極楽」のことを、教え伝える余地が十分にあると考えていいのではないのでしょうか。

法然上人は『一枚起請文』に、「ただ一向に念仏すべし」と、ただひたすらお念仏をおとなえしなさいと遺されました。何のためにお念仏するのかといえ、これも『一枚起請文』に、「ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞと思いとりて申すほかには別の仔細候わず」と明記されています。

つまり、私たちがお念仏をとなえるのは「往生極楽のため」なのです。「極楽」に「往生」生まれて往く「ため」にお念仏をとなえるのです。私たち浄土宗僧侶にとってはまったく当たり前、分かり切ったことと思いがちですが、浄土宗檀信徒の方々でも、一般の人はもちろんですが、分かっていない、理解できていない人が多いと考えるべきです。

もつとはつきり言えば、南無阿弥陀仏となえるお念仏は、困った時苦しい時の神頼みに発する言葉でもなければ、訳のわからない呪文でもない、と強調すべきなのです。

どうか「極楽」に生まれて往けますように、そしてその「極楽」で先立ったなつかしい人たちと再会できますよう、阿弥陀さまどうぞよろしく願います、それが「南無阿弥陀仏」となえる目的なのです。しかも、阿弥陀仏は極楽に生まれたいと願う者を迎えに来てくださるのです（『仏説無量寿経』第十九来迎引接の願）。つまり、極楽に生まれるために死になつてお念仏しなければならぬ、ということではなく、私が今となえるお念仏で、かならず、間違いなく「極楽」に生まれることができる、信じ、願うだけでいいのです。そこで、そのように説いてこそ、お念仏をとなえる気持ちを持つていただけるのではないでしようか。

なぜ極楽なのか

次に、ではなぜ往生していく目的地が「極楽」でなければならないのか。「極楽」とはいかなる所なのかを分かりやすくお話すべきです。

最近よく「極楽とはそりゃーゴーク楽な所」、あるいは「修行するのに極楽ごくな所」と説明する方がいます。その通りだと思いますが、ハッキリと極楽をそのように表現してある書物（平成23年『現代語訳浄土三部経』〈浄土宗〉一六頁）がありましたのでそのまま引用してみます。

阿弥陀仏の四十八願は、私たち凡夫を、阿弥陀仏が自ら建立した浄らかな世界（極楽浄土）へ救い摂り、そしてそこで仏となるための修行を完成させるためのもの、ということができます。

極楽浄土とは、煩惱に縛られることのない世界。仏となるための道をまっすぐに歩める世界です。阿弥陀仏の本願を信じて念仏をとなえ、まず浄土に往生し、修行しやすい環境のなか、仏道修行に励み、仏となる。これが阿弥陀仏の極楽浄土への往生を願う理由です。

「極楽浄土」へなぜ「往生」するのか。そこは「修行しやすい環境」であるから、そこでなら「私たち凡夫」であっても、「仏道修行に励み、仏となる」ことができるから、だからこそ「極楽」へ往生することを願う求めるのです。

しつこい謂いになります。ここに明記されるごとく、「仏道修行にはげみ、仏となる」ために私たちは「極楽」を目指すのです。「極楽浄土」とは、「煩惱に縛られることのない世界。仏となるための道をまっすぐに歩める世界」だからこそ、私たちは「極楽」へ往かなければならないのです。私たちの人生の最終目的は、今の世後の世かけて「仏となる」こと。別の言い方をすれば「悟りを開く」あるいは「煩惱をなくす」ことです。それが叶うのが阿彌陀仏の「極楽」であることを明確に説いてこそ、「極楽」に生まれたい、生まれるべきなのだという思いを喚起することができます。

「極楽」が「修行しやすい環境」であることは『浄土三部経』に詳細に説かれていますので、適切な部分をお話すべきです。例えば『仏説阿彌陀経』には、「其国衆生 無有衆苦 但受諸楽 故名極楽」の有名な件りがあります。「其国（極楽）」の「衆生」は「苦」が「無」いのです。ただ「楽」のみ「受」ける、そのような良い所、素晴らしい環境だから「極楽」というのだと、お釈迦さまが『阿彌陀経』にお説きなっていることを、分かりやすく檀信徒に説いていきたいものです。もちろん、『仏説無量寿経』と『仏説観無量寿経』にもいろんな形、言葉で「極楽」の素晴らしさが描かれているとお話することも必要でしょう。

凡夫の自覚

そして次に、なるほど「極楽」は「仏となる」ために希求する所であるということは分かったけれど、だからといって私は特にそこへ行きたいとは思わない、と考える人もいるはずです。「今だけ、金だけ、自分だけ」というフレーズがありますが、現代はまさに、今、お金がそこそこあって、自分に何か被害が及ぶことがなければそれで良い。そのように考える人も多いのではないでしょうか。

科学文明が発達し、金さえあれば、暑くもなく寒くもないという「極楽」のような環境をつくることのできる現代です。しかし、この私は自分自身の心を正しくコントロールできているだろうか。我が心は、誰にも何にも恥じることのない私です、と言えるのだろうか。そのように我が身を、我が心を見つめ直してはじめて、そんないい加減な自分自身を何とかしたいという気持ちになってくるはずです。

そのような、悲痛な想い、慚愧の涙を流された人こそ、私たちの法然上人ではなからうかと思えます。「余がごときは、すでに戒定慧の三学の器にあらず」のお言葉は、比叡山で修行に邁進し、秀才の誉高い法然房源空の悲痛な、心の底からのお気持ちであったはずです。

「三学非器」の救われようのない自分であり、「また凡夫の心は物にしたがひて移りやすし。猿猴の枝につたうがごとし」と嘆かれたのは、けっして他者のことではなく、法然上人自身の痛切な心の叫びだったはずです。この法然房源空こそ、心定まらず、煩惱に心穏やかならざる毎日を送る者である。そのような私が助かる道、救われる教えは、他力本願念仏の教えしかないとお念仏の教えを高らかに宣揚されたのです。

すなわち善導和尚の『観経疏』の、「一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に、時節の久近を問わず。念念に捨てざる者、これを正定の業と名づく。かの仏の願に順ずるが故に」と、凡夫が「報土」すなわち「極楽」に間違いなく生まれて往く道をお示しくだされたのです。

法然上人当時の自力聖道門では、「極楽」に「往生」する術がなかったのです。しかし、自己を見つめ、自分自身が「凡夫」であることを意識して初めて、「そこで仏となるための修行を完成させる」ことのできる「極楽」を願い求める心が起こるのです。「仏となる」とは前記したように「悟りを開く」ことですが、別の表現をするなら「迷いをなくす」「心が穏やかになる」と言ってもいいのではないのでしょうか。この私が「南無阿弥陀仏」とお念仏をとなえることにより、今はまったく煩惱だらけの毎日ではあっても、かならず阿弥陀仏は

この私を「極楽」に迎えてくださる。そして、そこで「仏となる」ことができる。そのように信ずることにより、信じてお念仏の日暮らしをすることによりこの世の迷いが軽減し、また煩惱を減しきることのできない我が身を反省する気持ちになるのです。

地に強く つけばはずみで上がる鞠 身を下してぞ すすむ極楽

この私は煩惱だらけの救われようのない者であると謙虚に見つめ直してこそ、「凡夫」であることを自覚してこそ、阿弥陀仏の第十八願、念仏往生の願がありがたくいただけるのです。「乃至十念」という誓いがまことに尊くいただけるはずです。

結び

私の好きな牧水の歌をここに引用します。

けふもまたこころの鉦かねをうち鳴ならしうち鳴しつつかくがれて行く

言うまでもないことかもしれませんが、「けふ」は「今日」、「あくがれて」は「あくがれて（懂れて）」です。

若山牧水、明治時代の人（昭和三年没）ですから今はもうあまり馴染みのない歌人ではあります。旅を愛し、お酒が大好きな人でした。

そんな牧水は、「けふもまた」、今日も昨日もさらには明日も明後日もずーっと、「ころ」の中の「鉦」を「うち鳴し」続けたのです。もっといい歌を作りたい、まだまだいい歌を詠みたいという一途な想いで、「あくがれ」続けたのです。目標、目的、目指すものを明確に心に抱いての一生だったはずです。

私たちもいつかならず、自分の人生が終わるときがやってきます。だけど、お念仏と見える私は間違いなく阿弥陀仏の「極楽」に迎えられるのです。そこで、なつかしい人々の「浄土の再会」があり、さらには自身「仏となる」道がつながっているのです。

そのように我が「ころの鉦」を打ち鳴らし続けようではありませんか。我が求める所は「極楽浄土」とあくがれ続けましょう。

「ただ一向に念仏すべし」のご遺言を心に刻み、お念仏をとなえ続けることこそ、浄土宗

開宗八百五十年にあたり、法然上人に対する何よりの報恩行と信じます。

◎第2章◎

布教实例

凡夫のためのお念仏

山形教区 浄土院 日野 宗雄

【設定】 御忌会等の檀信徒に対してのご法話

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真实義

つつしみ敬って拝読し奉る。宗祖法然上人ご法語に曰く、

「念仏はようなきをようとす。ただつねに念仏すれば、臨終には必ず仏きたりてむかえて、極楽にはまいるなり。」と。(十念)

本日は御忌会にお越しいただき、皆さま方と尊いご縁を頂戴しましたこと誠に感謝申し上げます。どうぞ、お体をお楽にしてお聞きください。本日の御忌会とは、浄土宗をお開きになられた宗祖法然上人のご遺徳をお偲びするご法要です。法然上人のご命日は1月25日ですが、季節の良い時期に御忌会を勤めているご寺院さまも多いようです。

さて、浄土宗は法然上人が立教開宗され、開宗八百五十年をお迎えしました。ご存じの通り「宗」とは、抛り所とか趣旨の意味ですが、浄土宗の教えの趣旨とは、

- ①何を目的とするか⇨極楽浄土への往生
- ②誰に帰依するのか⇨阿弥陀さま
- ③何を実践するのか⇨お念仏(称名念仏)となります。

つまり、法然上人がお伝えくださった浄土宗のみ教えとは、阿弥陀さまに帰依し、お念仏をおとなえし、極楽浄土への往生を目指すみ教えでございます。特に開宗されてからの法然上人は、様々なお言葉やご法語を通してお念仏を布教・教化されました。その中で、先ほどお読み致しました、法然上人のご法語の一節をもう一度お読みいたします。

「念仏はようなきをようとす。ただつねに念仏すれば、臨終には必ず仏きたりてむかえて、

極樂にはまいるなり。」

このお言葉は、法然上人が晩年に讃岐の国に配流になったときにそばに仕えていた、随蓮ずいれんという弟子が伝えたものです。随蓮は法然上人から教えを聞く中で、文字の読み書きを知らない人でも、阿弥陀さまを信じて念仏すればその心に必ず応えてくださる、そう理解していいました。ところが、法然上人が亡くなられて二年程が経った頃に、「学問をして三心さんじんを学んだうえでとなえなければ、どれほど念仏をとなえたところで往生できない」と言う人がありました。三心とは至誠心しじょうしん（いつわりのない心）、深心じんしん（自らのいたらなさを深く見つめ、阿弥陀さまの本願を深く信じる心）、廻向発願心えこうほつがんしん（善根や功德を極樂往生に振り向ける心）です。これに対して随蓮は「法然上人は『お念仏のとなえ方には、定まった形式がないことがひとつの形である』とおっしゃった」と答えたという話があります。まさしく、先ほど申し上げました「念仏はよくなきをようとす。ただつねに念仏すれば、臨終には必ず仏きたりてむかえて、極樂にはまいるなり。（お念仏には決まった形などないというのが決まりです。ただ常にお念仏をとなえてさえいれば、臨終には必ず阿弥陀さまが来迎してくださり、極樂浄土へ往生できるのです。）」ということなのです。ですから私たちは、阿弥陀さまのお誓いを信じて、ただただ南無阿弥陀仏とおとなえすればよく、それ以上の細かいお作法や難しい

理屈はとくに必要ないんです。

法然上人の真意が随蓮の言うとおりだったことは、ご遺訓である「一枚起請文」を読むとわかります。この「一枚起請文」は、法然上人が亡くなる二日前の建暦二年（一一二二）正月二十三日に、念仏の要義を記した法然上人のご遺訓でございます。その一文に、

「智者のふるまいをせずして ただ一向に念仏すべし」

とございます。この「智者のふるまいをせず」とはどういう意味なのでしょうか？ 別に「勉強して賢くなるうなどと、思いなさんな」と諭されているわけではありません。何故なら、法然上人ほど勉強された方、研鑽を積まれた方はいらっしやらないのですから。そして「ただ一向に念仏すべし」という言葉でお念仏の要点を説いて遺言状を結ばれています。身も心も投げ出して阿弥陀さまの本願を信じ、手には数珠をとって口には南無阿弥陀仏とおとなえさせていただく。お念仏をおとなえしているうちに、阿弥陀さまのお力によって、お念仏に対する、人生に対する正しい心構えがおのずと身についてくるのでございます。

さて、近頃「ランキング」という言葉をよく耳にします。昨今のせわしない世相を反映してか、やたらとランク付けが目につきます。

このランキングは、格付けのようなものですが、その歴史はふるく、勅撰集の『古今

和歌集』や『新古今和歌集』にまでさかのぼるそうでございます。当時の歌人たちはこうした勅撰集に、自分の歌がいくつ掲載されたかで一喜一憂し、そのランクを決めるに至ったといえます。いま名前を挙げました『新古今和歌集』は、まさしく、法然上人が生きた時代に編纂されたものです。八百五十年、いやそれ以上前から、ランキングは身近に存在していたんですね。

しかし、星の数ほどある格付けは所詮、人間の弱さの表れではないかと思えます。今も昔も自分と他人とを比べて、自分は相手よりどこが優っているか、些細な差異を確かめずにはおれませんね。信仰の世界も例外ではありません。気がつく、「私は念仏をたくさんとえているぞ」「オレの方が信心は深いんだ」「あの人もこんなに勉強しているぞ」などという悲しい慢心に支配されてしまいます。つねに自分が相手よりも強いことを確認したがるのは、実は弱さの裏返しではないかと思うのです。そして、その弱さとは人間の本質、性(さが)ともいえるものではないでしょうか。

法然上人は、そのような弱さや愚かさを抱えた私たち人間のことを「凡夫」と仰いました。その上で、阿弥陀さまはこのような煩惱をもった凡夫であることを百も承知で、お念仏をとなえる私たちに手をさしのべて下さっているとお示しになったのです。仏教に限らず、いろ

いろいろな学問を勉強することが悪いはずはありません。ただし、その勉強した知識は時として
お念仏の邪魔となり、慢心に繋がったり、あるいはもっと奥の深い教えがあるので……と
詮索したりすることを法然上人は論じていらっしやるのですね。

「往生の為にはお念仏以外に何も必要はないんですよ。勉強して知識をつけることは結構
だけれども、決して自分が智者であると見せかけることなく、おごりたかぶる心を打ち捨て
て、ただひたすらに、お念仏をとなえなさい」とおっしゃっているのです。

このように、法然上人のお念仏は「やうなきをやうとす」、作法や形式、知識など関係な
く、ただただ「南無阿弥陀仏」とおとなえするお念仏なのでございます。私たちは様々な煩
悩を持ち、弱さや愚かさを抱えた「凡夫」ですから、そんな私たちが行う作法・形式・知識
によって往生できる、救われるわけではありません。そうではなく、阿弥陀さまを信じてお
念仏をおとなえすることで、阿弥陀さまによってお救いいただくのです。「やうなきをやう
とす」というご法語は、そんな作法・形式・知識を気にするのではなく、ありのままの姿で
よいから、とにかくお念仏を信じておとなえし、相続する、続けることが大切なのだ、そ
う教えてくださっているのです。

私は小学校一年生から大学まで柔道に汗を流し、そして大学卒業後は高校の教員として子

供たちに指導をさせていただきました。柔道の創始者嘉納治五郎先生は「自他共栄」という言葉を大切にされます。この「自他共栄」とは、自分も他人もすべての人が和をもって、共に支えあい、共に栄えあうという意味です。私が一番あこがれた柔道選手はロサンゼルスオリンピック金メダリストで、山下泰裕先生でした。先生は、大学二年生の時に最年少で全日本 の頂点に立ち、その後は、28歳まで負け知らずで引退されます。山下先生は18歳の当時から瞬と背筋を伸ばし、インタビューを受ける姿や練習に対する姿は私たちの憧れの的でした。「あんな柔道選手になりたい」とその一心で私自身練習に励んだ思い出があります。そして、私が教員になり山下先生の講演を何度かお聞きする機会がございました。その中で、最年少で優勝した18歳当時の学生時代のお話をされました。町の中では急に「あっ、山下選手だ。握手してください。サインしてください」さらに、少年団の指導者たちは「山下選手は子供たちの手本です」と言われたり、お年寄りには「山下選手ですか?」と手を合わせられて拝まれたりと、いつも周りで見られているという緊張感があったそうです。しかし、大学の道場に行けば先輩やOBに「おーい山下。調子はどうか?おーい山下。道場が汚いぞ」と現実が待っているわけです。ですから、その当時は他人によく見られるように、よく思われるように他人の評価を気にして過ごしていたそうです。ある日、強化選手の合宿中にユーゴス

ラビアの柔道仲間に言われた一言で考え方が変わったそうです。「おい、山下。お前をいつも見ていると、他人によく思われるように生きていくような気がするんだ。本当の自分の姿は何なのか？本来の柔道家の姿なのか？」と言われたそうです。山下先生は「君はどのよう

に生きているのか？」「僕は、嘉納先生の「自他共栄」の言葉通り、自分も他人もすべての人が和をもって、共に支えあい、共に栄えあう。自分が他人からよく思われるように見せるのではなく、自分が内面から良くなるように生きるのが柔道精神ではないか？」と言われたそうです。その日以来、山下先生は「勝ち負けや他人からの評価を気にするのではなく、今までの価値観を捨てて自分の内面をよく見つめなおし、自分が柔道家として正しく生きているのか。自分が柔道精神に反していないのか。そして、何より自分がより良く生きているのかを大事にして過ごしています」と仰っていました。山下先生は、24歳の時にモスクワオリンピックの日本代表に選出されます。しかし、当時の国際情勢により日本はモスクワオリンピックへの参加をボイコットしました。山下先生は、悔しさはあったけれども人を恨むのではなくさらに稽古に精進し、4年後にロサンゼルスオリンピックで金メダルを獲得します。

山下先生はこう言います。「金メダルを取る選手は並大抵の努力では取ることが出来ません。世界でたった一人だけです。でも、勝負は時の運ですから勝敗は誰にもわかりません。今指

導者として伝えたいのは、もちろん金メダルを取ることでも頂点をめざすことも大事です。しかし、一番大切なのは今まで継続してきたことを間違いなかったと信じて、勝ち負けに関係なく、人生の最後には一人でも多くの人が人生の金メダリストになるように伝えて行きたい」と仰っておられました。

お念仏は、すべての人が阿弥陀さまにお導きいただき、そしてお救いいただけるみ教えでございませう。私達も日々生活の中で凡夫であることを自覚し、そのような私達だからこそお念仏をおとなえすれば、間違いなく阿弥陀さまが来迎してくださり、苦しみの無い極楽浄土へ往生させていただけることを信じていくのです。ありのままの姿で、構えることなく、とにかくお念仏することが大切なのです。誰かと比較する必要などありません。となりの誰かと比べるのではなく、阿弥陀さまと向き合うのです。常に周りの目を気にしていた山下選手が、自分を見つめることで大きな転機を迎えたように、私達も阿弥陀さまと向き合うことで、きっと生き方が変わってくると思います。

どうぞ皆さま、阿弥陀さまのお救いを信じ、そして、凡夫を救おうと願った法然上人のお念仏のみ教えを心にとめて、ただひたすらに「南無阿弥陀仏」とおとなえしていただきたいと願っております。

最後に皆さまと共に十遍のお念仏をおとなえさせて頂きます。

同称十念

俱会一処を願いて

静岡教区 報土寺 戸崎 博隆

【設定】 秋彼岸会自坊でのご法話

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真实義

つつしみ敬って拝読し奉る。宗祖法然上人ご法語に曰く

「会者定離は常の習い、今始めたるにあらず。何ぞ深く嘆かんや、宿縁空しからずば同一蓮に坐せん。浄土の再会 甚だ近きあり」と。(十念)

みなさま、秋彼岸会にお詣り頂き、ただ今は共々にお念仏をおとなえ致しました。

昔から「暑さ寒さも彼岸まで」と申しますが、今年は九月になっても例年になく暑い日が続いております。しかしながら、朝晩は暑さも和らぎ、秋の虫の鳴き声を聴きながら、少し涼しく感じる時もございます。

秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ 驚かれぬる 藤原敏行

季節は廻り、秋は確実に近づいています。

この時期の行事として「お月見」があります。「中秋の名月」とも言います。私が子供の頃、母がスキと栗とへそ餅を縁側にお供えして、お月さまを鑑賞したものです。皆さんもされたでしょうか？ 今はあまりされないようですが。「へそ餅」は、静岡県中西部地域独特の風習だそうです。丸く直径五センチから十センチ、真ん中がおへそのようにへこんでいます。そこに餡子を入れていただきます。なかなか美味しいですね。そもそも「へそ餅」は徳川家康公に由来しているそうです。ご幼少の頃のお名前を竹千代君と申します。三河から駿府（現在の静岡市）に人質に来ておりました。おへそは人の体の中心にあり大事なところ

ですから、当時の駿府の人達は、竹千代君が丈夫な体になり、すくすくと育ってほしいと願
い、へそ餅を作りただいていたそうです。もちろん家康公も召し上がっていたことでは
う。最近は特に大きな満月のことを「スーパームーン」と呼ぶそうです。満月を観るとその
見事な形と明るさに何か嬉しい気分になるものです。しかし、その後は上空を見ることもな
く、むしろ下ばかり見ていませんか？「何か落ちていないかなあ」そしてたまに上を見上げ
たらいつの間にかに三日月に。

あまりにも 満つれば欠くる ことわりを 忘れ顔なる 秋の夜の月

季節が確実にめぐるように、知らぬ間に月日ばかりが過ぎて行き、気づいてみれば、時は過
ぎ、世の中も変わり、人の思いや姿も変わる時、思わず無常を実感致します。

最初に拝読致しました法然上人のお言葉は、「人には出会いと別れが必ずあるものです。
会う者が必ず別れるということは世の定めであって、今に始まったことではありません。ど
うして深く嘆くことがあるでしょうか。過去の因縁が確かなものであるならば、極楽に往生
して同じ蓮の台に座ることができるでしょう。」このお言葉は、法然上人が四国へご流罪が

決まった際、別れを惜しむ九条兼実公に送られたものです。抑々のきっかけは、お弟子の蓮と安樂の行き過ぎた念仏布教によるもので、その責任を法然上人に結びつけられご流罪となりました。この時法然上人は既に七五歳になっておりました。兼実公はご高齢の法然上人の御身を案じ、「どうか行かないで下さい。この別れが今生の別れとなるかもしれない」それに答えて法然上人は「たとえ京と四国に離れていても、南無阿弥陀仏のお念仏をと念える者同士は、必ず極楽浄土の同じ蓮の台座に往生することができますよ」（一蓮托生）と兼実公に説かれるのです。

先き立たば おくるる人を 待ちやせん 花の台に なかばのこして

「私が先に極楽に往生を遂げたら、蓮の台の半座をあなたのために空けて、お待ちしていますよ」

コロナ禍、いろいろな事が起こりました。その中でも、人の命について改めて思い直すこともありました。私たちは、そもそも、生死しやうじの世界をさまよい続けている凡夫であります。

法然上人は八百五十年前、私たち凡夫のために比叡山西塔黒谷にある報恩蔵に一人こもりて、

四三歳の時、中国唐の善導大師の『観経疏』というお書物にある阿弥陀さまの本願念仏の教えに出会いました。そしてただひたすらに南無阿弥陀仏となえれば必ず救われるというお念仏のみ教えを私たちに示してくださいました。

阿弥陀経という経典に、必ずお浄土で再会するという「俱会一処」というお言葉があります。「もう一度大切な人に会いたい」という思いはどなたにもあります。

先日、テレビ番組の「徹子の部屋」に大和田獏さんが出演されていました。コロナ禍の二〇二〇年四月二十二日、最愛の奥さま岡江久美子さんがコロナウイルスに感染して、お亡くなりになられてから三年が経過しました。黒柳徹子さんから、「今、一番心に思うことは何ですか」と尋ねられると、獏さんは「今、久美子にもう一度会いたいです。久美子は見ただ目より若く見えました。いつも元氣一杯でよくしゃべり、明るい性格の女性でした。今、もし会えるなら、少し老けた久美子に会ってみたい」とおっしゃっていました。

お檀家に岩本光弘さんという方がおります。銀行を定年退職した後、お寺の行事にも参加するようになり、また一念発起し、当山の五重相伝にも参加されました。家庭では奥さまきよ子さんと大変仲が良く、どこへ行くにもいつも一緒に行動していました。二人の共通の趣味は「さだまさし」さんのコンサートに行つて、さださんの優しい歌声を生で聞くことでし

た。しかしながら、一昨年きよ子さんが体調を崩して、家族で看病を尽くしましたが、その甲斐もなく先に往生されました。その後四十九日を迎える頃に、光弘さんがお寺に来て一通のハガキのコピーを私に見せてくれました。それは令和四年一月一日午前零時二〇分からのNHK総合テレビの生放送番組「生さだ」^{なま}に応募したものでした。当日、期待しないで「生さだ」を観ていたら、ラストレターでこの手紙が読まれたそうです。きよ子さんと二人して毎回さださんのコンサートに行ったこと、そしてきよ子さんが昨年亡くなったことをハガキに書きました。それに対するさださんのコメントです。「人には出会いと別れがあるものです。新しい年となりました。新しい目標を持って奥さんの分まで元気で長生きしてくださいね」でした。光弘さんはテレビを観ながら感激のあまり涙を流して、とても嬉しかったとおっしゃっていました。そして、すぐにさださんのコメントをきよ子さんの仏前に報告し、いつものようにお念仏をおとなえしました。実は光弘さんは、長年糖尿病を患い、週に三回は透析を受けるために病院に通い続けていました。体が思うようにならないながらも、きよ子さんの一周忌を気丈に勤めました。そしてその年の暮れ、容体が急変して、突然お浄土に往生されました。八二歳の御生涯でした。

別れても心は交う蓮の糸 同じ台に登るうれしさ

光弘さんは、長年病氣と闘って来ましたが、五重相伝を受けてからは、人が変わったように、何事にも積極的に取り組みました。民生委員としても地域に貢献したり、自分の趣味も広がりました。

光弘さんは、人の命には限りがあるものと悟り、ただただ阿弥陀さまのご本願を頼りとして、ひたすらお念仏をとなえて、自身の往生を願い一日一日を大切に有意義に人生を明るく楽しく送ることができました。本年は法然上人浄土宗開宗八百五十年を迎え、法然上人の「凡入報土」のみ教えを受け止め、共々にお念仏をとなえてまいりましょう。

今席は、「俱会一処を願いて」と題しましてお取次ぎ致しました。それでは同称十念にて今席を閉じたいと思います。

同称十念

弥陀呼ぶ声に包まれて

京都教区 大善寺 羽田 龍也

南無阿弥陀仏となえ給えば、住所は隔つといえども、源空に親しとす、源空も南無阿弥陀仏となえたてまつるが故なり^①

開宗八百五十年を迎える令和六年、日本全国の浄土宗寺院では、慶讃法要がつとまり、檀信徒の皆さまが、法然さまとのご縁を喜び、お念仏に親しまれていることでしょう。

総本山知恩院御影堂の東側に、勢至堂、御廟へと続く長い石段があります。知恩院で最も古い建造物の勢至堂は、旧御影堂でもあり、まるで法然上人の息吹が感じられるような場所です。建暦二年正月二十五日、この世での命を終えられた法然さまの亡骸は、勢至堂より少し上の御廟へとまつられます。ご往生の後、月命日の二十五日には知恩講の法要がつとまり、法然さまを慕って多くの参拝者が訪れました。

跡を一廟に占むれば遺法遍ねからず、予が遺跡は諸州に遍満すべし⁽²⁾

しかしながら、法然さまはもつと大きな視点から、専修念仏、口称念仏、本願念仏のみ教えは、残すところなく、至らぬ里なく、月影の如くに伝わってほしいと願われました。お念仏の声するところこそが、「予が遺跡」と仰せになったのです。

開宗八百五十年の慶賀を迎え、全国の浄土宗門葉から、お念仏の声をあげることが重要です。

まさに今、多生曠劫を経ても生まれ難き人界に生まれ、無量億劫を送りても遇い難き仏教に遇えり。釈尊の在世に遇わざる事は悲しみなりといえども、教法流布の世に遇う事を得たるは、これ悦びなり⁽³⁾

この度、私たちは、生まれることの大変難しい人の世界に生まれ、滅多と出遇えない仏のみ教え、お念仏のみ教えに出遇えたのです。このご縁を喜び、生命を与えられた人生の目的を

考え、自分の命を大切にすることはもちろん、他者の命も尊重していかなければなりません。

朝焼小焼だ大漁だ

大羽鰻の大漁だ

浜は祭りのようだけど

海のなかでは何万の

鰻のとむらいするだろう

大正期の童謡詩人、金子みすゞの「大漁」という詩です。私たちが生きるためには、動物や魚の命を頂戴せねばならず、大漁と喜ぶのは人間中心の考えでありましょう。生き残った鰻が海の中で、仲間の法事をつとめていると考えた、小さな命を思う慈悲心にあふれた詩です。

法然さまが開宗された浄土宗でも、「共生」という理念があります。「全ての命は他の命と関係があり、自分の命と同様、尊重しなければならぬ」と、説かれます。また、「放生会」という法要では、頂いた命に感謝し、お念仏の声の中に、動物や魚を野や川に放ち、生

きものの命を大事にします。

僧侶の持ち物の一つが「錫杖」です。歩行、遊行する時に使用する杖です。先端に鏝が付いていて、突いたり、振ったりして音を出します。乞食するために、家々の門戸にて振ることが多いのですが、小さな命を守ろうと、小さな虫や動物たちを追い払う目的にも使用されました。また、同じく「濾水囊」があります。これは飲み水を濾すために使用します。理由は水中の小さな虫の命を大事にするためです。

血を分けた 仲と思えぬ 蚊の憎さ

ところが、夏の寝苦しい夜に、耳元でプーンと鳴ればどうでしょう。台所の影から茶色の油虫がゴソゴソと這い出れば……。 「パチン」と、大きな音がするかもしれません。それぞれ、るか私たちの命を育むためには、牛や豚や鳥の命も野菜の命をも頂戴しなければなりません。それらの命を全く無駄にすれば、私たちは三途（地獄・餓鬼・畜生）の世界に迷ってしまいます。

三途に還るべきことをする身をだにも、捨て難ければ、顧み育むぞかし。

まして往生すべき念仏申さん身をば、いかにも育みもてなすべし。⁽⁴⁾

畏くも命を頂戴する私たちは、お念仏をとなえる身とならなければなりません。一心に専ら弥陀の名号をとなえる必要があるのです。

鳥インフルエンザが確認された養鶏場では、防疫のために何万、何十万という感染していない鳥まで処分されます。作業に当たる方が心痛める時は、激しく鳥が鳴き、暴れる様子を見た時です。「何かにすがりつかなければ、心のよりどころがなければ、とてもできません」と、涙ながらに語られました。

建永二年（1207年）四国へ配流とられた法然さまが、途中、播磨国高砂に着かれました。そこで幼き頃より漁師として暮らす老夫婦が、法然さまに泣きながら手を合わせて、

物の命を殺す者は、地獄に堕ちて苦しみ堪え難く侍るなるに、如何してこれを免れ侍るべき。助けさせ給え⁽⁵⁾

（生き物の命を奪う者は、地獄に堕ちて苦しみが堪え難いようですが、どのようにこの

苦しみを免れることができましょうか。お助け下さい⁽⁶⁾

と、すがりました。法然さまは二人をあわれみ、

「汝がごとくなる者も、南無阿弥陀佛と唱うれば、佛の悲願に乗じて浄土に往生すべき」旨、懇ろに教え給いければ、二人共に涙に噎びつつ喜びけり⁽⁷⁾

（あなたのような者も、南無阿弥陀仏となえれば、阿弥陀仏の悲願に助けられて、浄土に往生できることを、丁寧⁽⁸⁾に教えられたので、二人とも涙にむせびつつ喜んだ）

と、お伝記にあります。

それからは、生活のために漁師の仕事を続けつつ、口にはお念仏をとなえ、夜には家に帰り二人でさらに、お念仏を夜遅くまで申されました。その姿は周辺に住む方を驚かせるほどでありました。

念仏を修せん所は貴賤を論ぜず、海人漁人が苦屋までも、みなこれ予が遺跡なるべし、

とぞ仰せられける。⁽⁹⁾

(念仏の声するところは、貴賤を問わず、漁師たちの質素な家までも、すべて私の遺跡とすべきです)⁽¹⁰⁾

戦後すぐ、私の祖父が住職の代に、ある檀家のご夫婦が、お寺の門小屋へお住まいでした。敗戦で大陸より命からがら内地へ戻られ、住居が定まるまで、しばらくお寺に仮住まいをしておられたのです。戦争で幸福な日々を奪われ、逃避行の最中には三歳の息子まで失われたのでした。失意と、寂寥と、虚しさが涙と一緒にこみ上げました。

きつと、お二人は阿弥陀さまの慈悲を求めて、無意識にお寺へと足が向いたのでしょう。粗末な作りの門小屋から、毎日涙まじりのお念仏の声が聞こえました。阿弥陀さまを頼み、阿弥陀さまにすがる、夫婦のお念仏の声がありました。

「もっと食べ物渡し、着るものを与えられていれば、助かった命かもわからない。もっと早く内地へ戻っていれば、無事だったかもしれない。せつかく人の身に生まれ、命を頂いて、夫婦二人の間に生まれてきてくれたのに、ごめんね救えなくて。ごめんなさい、あなたを育ててあげられなくて」

もとより、この世で地獄の責めにあつたような気持ちがあつたのでしよう。

偏に阿弥陀仏の願力にて、煩惱をも除き、罪業をも消して、かたじけなく手ずから自ら極楽へ迎え取りて、帰らせまします事なり⁽¹¹⁾

お念仏を申せば、阿弥陀さまがお慈悲のみ心で、私達の寂しさを慰め、悲しみをいたわり、明日を喜ぶ希望の泉をお授けくださいます、なおありがたくも、阿弥陀さまご自身の手で極楽浄土へとお運びいただけるのです。

一心専念弥陀名号 行住坐臥不問時節久近

念念不捨者 是名正定之業 順彼仏願故

お念仏を捨てず、止めず、忘れず、お念仏を毎日続けることが、私たちを安穩、安樂の世界に導いて下さり、弥陀浄土、極楽浄土へと救ってくださる、この上ない真理の修行です。阿弥陀さまの魂魄がこめられた修行なのです。何故なら、それこそが阿弥陀さまの、生きと

し生けるすべてのものを救おうとされる、お指図、ご指南だからなのです。

予が遺跡は諸州に遍満すべし

さあ、全国からお念仏の声をあげましょう。

【註】

- (1) 元祖大師御法語 後篇第二十九
- (2) 元祖大師御法語 前篇第三十
- (3) 元祖大師御法語 前篇第一
- (4) 元祖大師御法語 前篇第十八
- (5) 法然上人行状絵図 第三十四卷
- (6) 現代語訳 法然上人行状絵図 第三十四卷 浄土宗総合研究所
- (7) 法然上人行状絵図 第三十四卷

- (8) 現代語訳 法然上人行状絵図 第三十四卷 浄土宗総合研究所
- (9) 元祖大師御法語 前篇第三十
- (10) 法然上人のお言葉 総本山知恩院布教師会
- (11) 元祖大師御法語前篇第二十九

お念仏生活を身につけよう

佐賀教区 光明寺 早田 空善

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬って拝読したてまつる 宗祖法然上人ご撰述、選択本願念佛集に曰く

「往生之業念仏為先」(十念)

どうぞお楽にしてください。

今拝読いたしましたお書物は、法然上人が66才の時、上人に深く帰依されている元関白職、現代で言えば内閣総理大臣にあたります九条兼実公が、浄土宗のみ教えをお書物にしていたのだきたいとご要望なさって書かれたものです。16章に分けて詳しく書かれております。この

第9章に正しいお念仏生活の過ごし方が四修として説かれて居ります。

このたびは、法然上人が万人救済のために浄土宗を開かれまして八百五十年の大法要でございまして、法然上人への報恩、私たち自身の念仏信仰を深めるために、四修のお取次ぎをさせていただきます。

正しい生活というと皆さまもあろうかと思いますが私は、お医者さまから「和尚さん、○の数値が高いですよ。このままにして居られたら○○という病気になる可能性がありますから生活習慣を改めてください」とご指導を受けたことがございます。正しい生活態度を習慣づけるということは、健康だけではございませんね。人生も正しい生き方過ごし方がありますでしょう。善悪の道も、礼儀作法、人の情や宗教心をもった人ほど幸福になれると思います。お念仏も正しい生活態度を習慣づけ、信仰を深めることが大切でございます。

四修の第一番目は「恭敬修」、くぎ・ようしゅです。どうゆう意味かと申しますと、恭敬の恭は形で敬う、敬は心で敬うという意味です。これは世間の生活でも大切ですね。例えば、皆さんのお子さんが大変お世話になった方とお会いした時に「先日は子どもたちが大変お世話になりありがとうございました」と口で言うお礼もお礼には違いないけれど、「形」つまり頭を下げて丁寧「先日は子どもたちが大変お世話になりましたありがとうございます」

た」とお辞儀をしてお礼を申しますと、相手さまも良い気持ちになりますでしょう。それと同じように形と心で阿弥陀さまやお浄土のすべての聖をつつしみ敬い形と心で拝むのでございます。具体的にお話いたしますと、まず、決して西に向かつて背を向けたり、痰唾をはいたり、大小便をしてはいけないと説かれています。すると、和尚さん、そうおっしゃるけれど、東に行く時には西に背を向けるじゃないですか。その通りですが、西とは私たちが目指すアミダ仏さまの西方極楽浄土ですから、できる限り仏さまに背を向けないように、私の背の方角はアミダ仏さまの極楽浄土があるのだということを中心掛け生活しましょうということでございます。

それから、敬い拝む時には合掌礼拝して拝みます。合掌は右の手がアミダ仏さま、左の手が私です。合掌はアミダ仏さまと私が一緒になる姿で、胸の前におよそ45度くらいにして、お念仏をおとなえした方がよりありがたい実感をいただけます。

また、中にはお体の都合で合掌ができないという方も居られるでしょうが、その時は心の中で合掌して居ると思つて敬いの心をもつて拜んでくだされば良いと思います。お像や絵に描かれた阿弥陀佛さま、観音菩薩さま、勢至菩薩さま、善導大師さま、法然上人さまを真佛、真の聖だと思つて合掌して拜んでいただくことです。世間のお師匠さまでも、仰げば尊し

我が師の恩」と申しますね。仰いで敬いの心をもって合掌して拝ましましょう。

お墓参りをなさる時でも同じです。まず竿石を大恩の人、最愛の人のお体を拭かせていただく気持ちで、きれいな水で流して、布で拭き上げ合掌して拝む。お仏壇にお参りする時も同じです。常に仰いで合掌して敬いの心で拝む。ろうそく、線香、お花、供物を捧げて拝みますと、往生されたご先祖さまと心が通じ合っておりがたい、敬虔けいけんな心にさせていただけるんです。

皆さんもそれぞれ苦勞して来られたと思いますが、皆さんの親はもっとご苦勞なさって来られたんじゃないでしょうか。私（親）は苦勞してもよい。子どもたちが幸福になつてくれるのならば頑張つてくれた父母の事が偲ばれて、もし親父やおふくろが生きていたなら、兄弟みんなで孫子も連れて親父やおふくろを温泉に連れて行って、二人で露天風呂に入った時には「ばあさんや、長生きしてよかったなあ」と言うてくださるような親孝行の一つもしたかったのに、何もできずにごめんなさいね、またお参りさせていただきますと、心が通じ合つて自然に敬虔な気持ちにしていただけです。また、恭敬の生活とは、私をお導き頂くご住職、和尚さまを敬う、お念仏の同行を敬う、仏法僧も敬い拝むことを恭敬修と申しま

次は「無余修」、むよしゅと読みます。お念仏一筋の生活を続けるといふことです。何故かと申しますと、私たち罪惡の凡夫が極楽往生する為には他の修行では千中無一、ほとんどできないのです。浄土宗のお念仏は、ま心でアミダ仏さまに助け給えと思つてナムアミダブツとなえるだけでいかなる能力、人柄の人でも平等に往生できます。百人が百人とも極楽往生ができ、この世の中もアミダ仏さまからお護り、お育てをうけることができる唯一無二のみ教えだからナムアミダブツ一筋の念仏生活を送りましょうといふことです。

法然上人のお弟子の中に阿波介という愚かで邪見な陰陽師が居りました。人をだまして財産をまきあげ、贅沢三昧、何人も妻を持ち、酒池肉林、衝動のまま欲望を満たす生活をして居りました。仏教では誰でも心の奥底にはお釈迦さまのようになれる仏の種、仏性があると説かれています。その証拠に阿波介はこう思つたのです。「今わしはお金もあり贅沢三昧の生活をしていて楽しいが、この生活は決して人として善良なものとは思えない。おれは死んだら地獄落ちするに違ひない。何とか極楽往生したい」阿波介にも仏の種がやはりあるんです。そう思っている時に法然上人のお弟子さんの一人、俊乗房重源さまが平家によつて焼き崩れた東大寺大仏殿の復興の為に、お札を売り出したのです。どんなお札かと申しますと、『法華経』というお経は6万9384文字あります。この『法華経』の一文字一文字の下に

アマダと書いて売り出したのです。この札をもって居れば地獄行きの人でも救われると聞いた阿波介は、7日間で7枚のお札を手に入れて、これで極楽往生は間違いないと安心していたのですが、8日目にお札を見たら笹の葉に変わっていて、その時阿波介は仏罰が当たったと今になって後悔したのでした。お札では救われないならお坊さんになる以外に手はないと考えて居りましたそんな中、知人の家に行く時に道を間違えて何倍も時間がかかったことで、「世間の道でも間違うと何倍もかかる、お坊さんの道でも同じ、よいお師匠さんにつかない」と極楽往生はできない」と思い、法然上人の弟子である熊谷直実公こと法力房蓮生のご縁で、法然上人とお会いし、上人のみ仏さまのようなお姿、お話に自らのおろかしい人生を深く反省させられてお念仏一筋の生涯を送り始めたのです。皆さんが手にしている浄土宗の二連念珠はこの阿波介がお念仏を申しやすいようにその原型を作ったと伝えられています。

皆さまが持つて居られる念珠は三万遍となえられるもので、小さい念珠玉のものは六万遍となえられるものがございます。ある時法然上人がお弟子さまに、「私がとなえる念仏とあの阿波介がとなえる念仏とどちらがよいか」と問われた。お弟子さまは解かって居られたのですが、あえて確認するために「それは法然上人のお念仏です」とこたえたと、上人は、「あの阿波介も、仏たすけ給えと思つてナムアマダブツと申す。源空（つまり法然上人のこ

とです)も、仏たすけ給えと思いでナムアマミダブツと申す。全くおなじである」と仰せになると、阿波介は毎日数万遍のお念仏行者となり、最後は奥州平泉中尊寺の金色堂の前で合掌して座り、お念仏を百遍となえて往生をとげ、村里の人が集まり葬送されたのです。何と火葬のあとの亡き骸は水晶のように輝いていたと伝えられています。お釈迦さまが、「人生最後は拜まれる姿になってこの世を去れ」と説かれています。お念仏一筋で阿波介は極楽往生し、人柄も育てられて、この世、後の世のお救いをうけることができました。お念仏一筋の信仰生活を無余修と言うのでございます。

次に「無間修」、むけんじゅと読みます。間(すきま)のない念仏生活、つまりお念仏を忍耐強く続けるという意味です。

落語家のK名人は、私が落語家として大成できたのは、父から辛抱強く努力しなければ何事も実は結ばないという魂のこぼを頂いたからだ、それを皆さんに紹介いたします。素晴らしい言葉ですので、紙に書いてきました。一緒に読んでみましょう。

では、「一念発起は誰でもする。努力までならみんなする。そこから一歩抜き出る為には、努力の上に辛抱という棒を立てる、この棒に花が咲く」忍耐強く努力したおかげで超一流の落語家になれたのです。

お念仏も忍耐強く精進しなければなりません。お念仏をし続けるためには、毎日の日課念仏を定めて精進いたします。一日三百遍、五百遍、千遍、一万遍、法然上人は70才過ぎてからは毎日七万遍お念仏をとなえられたとお伝記に書かれています。それぞれ皆さんも五百遍、千遍と目標を立てると続きやすいと思います。お念仏を続けることを無間修と申します。

最後は「長時修」、じょうじしゅと読みます。入信してから命終するまで一生涯、中止せず続けることです。

父の布教の先生は学徳兼備なお念仏者であられたそうです。この先生に父は一年間ご指導していただいたおかげで布教ができるようになったと深く感謝して居りました。先生は臨終の間際まで自坊の仏間に寝ながら枕元に木魚を置き、叩く棒を逆手で持って叩いて「ナムアミダブツ」ととなえながらご往生されたというお話を聞いて、父は先生のような往生がしたいと申しておりました。父は85歳の臨終の間際まで、毎日お念仏をとなえて、平成12年5月15日の3時、「お父さん」と呼ぶと、臨終直前にパッと目を開き、家族に向かって「ア……………」と話しかけてきました。1、2分後、目を閉じ、父の目から一筋の涙がこぼれ往生を遂げました。父は生涯お念仏をしたおかげで極楽往生が出来ました。

私たちも命終が必ずきます。「あなたが前にお浄土に往生したけれど、みんながよくして

くれていい人生だった」と、そういう思い出をもって浄土で再会できるようにお念仏の生活習慣を身に付けたいものだと思います。

敬いてただみ名ばかり一筋につとむるぞ四修

浄土宗開宗八百五十年を仏縁といただき、益々のお念仏ご精進をお願い致しまして終わらせて頂きます。

同称十念

◎第3章◎

学びを深めるために

開宗八百五十年——法然上人の立教開宗以後の布教・教化 立教開宗後の法然上人

大本山金戒光明寺法主 藤本 淨彦 台下

はじめに——法然上人の立教開宗の機微——浄土往生の自証確証と教化宣教の契機——

雖揉みするような懸命な気持ちで法然房は、寒(冷)湿(気)貧(困)にして(議)論の熱い西塔黒谷の報恩藏に籠って「一切経」読破すること五遍に及びましたが、自らが得道しえる教行に辿り着けませんでした。特に心を集中して読むことさらに三回ほどで確信を得ました。

「ついに一心専念弥陀名号 行住坐臥不問時節久近 念々不捨者是名正定之業 順彼仏願故の文に至って、末世の凡夫は弥陀の名号をとなえれば彼の佛の願に乗じて確かに往生を得ることが出来るという根拠を確かに思い定めました」と確信されるように、長年にわたって求めに求めた「三学の器に非る」自己が救われる(得道)仏教、すなわち「我が心に相応する教え、我が身に耐える修行」の確信でした。まさに「一心専念弥陀名号……」に身を託した

「承安五年の春、生年四十三、立ちどころに余行を捨てて念仏に帰入」です。

法然房の眼目は「我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さんためなり」にあり、その根拠は「もし、天台によれば、凡夫浄土に生まるることを許すに似たれども、浄土を判ずること浅し。もし、法相によれば、浄土を判ずること深しといえども、凡夫の往生を許さず。諸宗の所談、異なりといえども、凡て凡夫報土に生まるることを許さざる故に、善導の釈義によりて、浄土宗を立つる時、すなわち、凡夫報土に生まるること現わるなり」にあり、「もし、別の宗を立せずば、凡夫報土に生ずる義も隠れ、本願の不思議も、現れ難きなり。しかれば、善導和尚の釈義に任せて、堅く報身報土の義を立す」と断言します（『行状絵図』第六卷）。法然房自身の抱く課題解決に直結しました。

自らが救われる「往生浄土の確信」は、自証であり已証として確かに把握されますが、しかし、自らの得道（往生・救い）の確信を得た法然房には、その教えの確信を「万人が苦悩するゆえに万人が共に救われる仏法」として語り導くことが出来るか否かを、深く静かに真剣に戸惑い自問自答せざるを得ませんでした。この自問自答こそが注目されなければなりません。⁽¹⁾

醍醐本『法然上人伝記』では「他人のために教えを弘めたいと思っても、時機が叶わず惑

い思つて眠る夢の中で、雲の中に無量の光が差し、百宝色の鳥が飛び交い、突如、生身の善導に逢いました。腰より下は金色で腰上は普通の人で、その高僧は『汝は専修念仏を衆生に弘めるのであるから、汝の前に来たのだ。私は善導なり』と告げました。それ以後、この教えは年々次第に繁昌して流布しない所はありません（『昭法全』四三七―八頁）と法然房の夢中での出来事を伝えていきます。明らかに、夢中での善導大師との、半金色の二袒対面^二が揺るぎない確信を与え、「汝は専修念仏を衆生に弘めるのであるから、汝の前に来たのだ。私は善導だ」の言葉に真実押し出されるがごとく勧められて、法然房をして自行求道から化他教化へと決断させ、「我、浄土宗を立つる意趣は凡夫の往生を示さん^二がため」の教化実践（浄土宗開宗）の、^二時^一が熟^二します。法然上人における「自行から化他への熟時」の出来事です。^二時^一

自行求道から化他教化へと確かな確証を得た後の法然房の行実について『行状絵図』や諸伝記は「比叡の山を下りて西山の広谷という所に居を移しました」と伝え、その後^二に吉水^一の地へ移動したとします。伝記描写は、事象記録の一点を語り、次なる一点を語りますが、地理的に私見を挟みますと、東山の主峰比叡山と反対側の真西に位置するのが西山広谷です。その距離を移動する法然房の心情に導かれる行動は、自らの「口称念仏必得往生」の証得を他者へ弘める教化への機縁を心待ちしつつ、東山霊峰の比叡西塔黒谷から、当時の叡山修行

者が往来したように雲母坂を下り白川筋から歩み高台麓の天台念仏に由縁する不断念仏道場の聖地、真正極楽寺(真如堂)へ足と心意気を運び、道すがら浄土往生の教えを弘める方途を見つけ出そうとしていました。

金戒光明寺第廿二世道殘源立(一五九三)上人著『紫雲山金戒光明寺縁起事』には、法然房は延暦寺常行堂の慈覺大師円仁の靈験を顕わす阿弥陀如来を本尊とする真如堂(真正極楽寺)で「念仏弘通の縁熟の地を祈誓し、(隣接する)当山の後ろを越えた林中に大石あり。石の上に暫らく休息し洛中洛外をご覧になり、素晴らしい靈地だと思案し居住して念仏弘通しよう、もしも念仏弘通の時機が叶うのならば瑞雲現われ給えと心中に願望すると、忽ちに此の谷より紫雲聳え金色の光が立ち込め、上人は靈瑞を肝に染め感応随喜し即座に居を此の地としました。腰を下ろし紫雲を見た石なので紫雲石と名づけるのです」(『浄全』二〇卷「黒谷誌要」四一二頁)とあります。

自行証得(自身の「宗」の確立)した法然房源空が他者教化する実践者の一步(自身の「宗」を他者と共有する「宗」を確かに踏み出したのが、くろ谷の地で、金戒光明寺です。「教え」と「教えを説く者」と「教えが説かれて教化される者」という三者が形成されるときに「宗(教)団」が成立し宗祖が認知されます。そのようなことからしますと、まさにくろ

谷の地は、前述の紫雲石の故事からして、浄土宗の教えを布教せんとする機縁となったところ、即ち立教開宗の御心を具体化してゆく機縁となった地といえるかもしれませぬ。⁽³⁾

(1) 法然房にとつて、四十三歳までの二十年間は、あたかも蚕が幼虫の時期に桑の葉を貪るように喰い咀嚼し飲み込んで糸を出し時間をかけて繭珠を形成し、その繭珠こそが金糸と成つてこの世に紡ぎ出される時を迎えることを興味深く意味していると思われます。言うところの貴重にして意味深い経過を深層に据えて、「立教開宗以後の法然上人像」が捉えられなければならないと思ひます。

(2) この出来事は、二祖対面、半金色の伝として宗脈では重視されます。夢を見ることが宗教的には「靈夢」として決定的な意味を持つことがあります。法然上人の行状の中でも多見されます。古来仏教においても注目され、夢を見る原因について、龍樹は「①他引(天人等が神秘力で夢を引き出す)②曾更(過去の事が再現)③当有(未來の運命応報)④分別(思考・願望の強力)⑤所病(病による苦痛)」を(『大毘婆娑論』〔大正蔵〕二七卷・一九三頁)、七祖聖問上人は『浄土三国仏祖伝集』で①実夢②不実夢③不明了夢④夢中見夢⑤前想後夢を挙げます(『僧祇律』〔統蔵〕一七卷・三一五頁)参考)。言うところの夢中での二祖対面は、他引・実夢であり決定

的な確信と決断、夢がもたらす真実を与えました。——中世日本宗教の特色としてだけで、夢を捉えるのではなく、夢は人間本性を顕出するとも言えます。今一度、夢こそが人を真実へと導く力であることを謙虚に学びたいものです。

- (3) 法然房の浄土往生自証確信は法然房自身の主体的、宗（自ら宗とする教えの確信）であり、善導の金言に導かれて比叡下山し諸人教化の実践の場を整えたことは、宗とする者の集まり（集団）形成として立教開宗の本意が内実共に標榜されることになる。その意味で、自行から化他へと自問自答する法然房の深い心身の出来事への注目を重視して余りあると思われれます。

〔附〕法然上人浄土開宗八百五十年を迎えるにあたって、令和五年五月九日早朝に全国浄土宗青年会の若き僧侶方が、行者姿で比叡山西塔黒谷報恩蔵を出発し、白川通りへそして真如堂（真正極楽寺）を経由してくろ谷山内の紫雲石に至るといふ、宗祖のご体験を一步一步に味得されて、大本山金戒光明寺御影堂にてお待ちの方上人像の身許に至りお念仏法灯の献灯儀を厳修されました。若き浄土宗僧侶二百余人の高声念仏がくろ谷麓に美しい音声で勢いよく厳かに轟くひとときを共に体験できたことは感激一入に満たされました。二十一世紀現代に根源から生き生きと脈打

つゝ念仏の声する處でした。

一、立教開宗を他宗へ開陳・検証と『大原問答』と『東大寺三部經講説』

「生年四十三歳」で捨聖帰淨すなわち専修念仏者として浄土立教開宗に至った以後の法然上人の行実は、「一心専念弥陀名号……」の実践者の日々の積み重ねです。「私は仏典を見ない日はありませんでしたが、木曾の冠者(義仲)が京都へ乱入の時、ただ一日仏典を見ませんでした」と述懐しています。それは、一一八三(寿永二)年で、法然上人五十一歳でした。一方で、高倉院に一乗戒を授けたり、鳥羽天皇の第二皇女上西門院に七日間の説戒をしたり、藤原邦綱の臨終の知識となり、平重衡を教化したり、摂政九条兼実の招きで説法・授戒をしています。特に注目すべきは、四十九歳の法然上人が東大寺大仏殿大勸進役を依頼されながらも辞退し推挙した人物(『行状絵図』第三十卷)、さらに五十四歳(文治二年)で天台座主顕真の招きで比叡山麓の大原勝林院で法門講説した大原問答に門弟と共に会合し(『行状絵図』第十四卷)、五十八歳の法然上人を奈良東大寺に招いて南都奈良の学匠や信者に『浄土三部經』の講説を設定するほどの間柄の人物、すなわち、俊乗房重源(一一二一—一二〇六)と

のことです。

①天台学匠宗徒との「大原問答」

元天台座主顕真法印は比叡麓の坂本で法談した法然上人の考えと人柄に心動かされ、大原に籠って浄土教の注釈書を読み「浄土の教えを見定めたので対談して欲しい」と願望しました。時あたかも寿永・元暦(一一八二―一一八五)の頃には壇ノ浦の戦い・平氏の滅亡など源平の争乱で世の中は騒然とし、都や田舎では命を失い悲嘆に暮れる人々が多く混迷の時期でした。

上人五十四歳の時(文治二(一一八六)年)に、比叡山麓の大原勝林院で大原問答が開かれました。数年前に東大寺大仏殿大勧進役の依頼を受けた法然上人が推挙した俊乗房重源とその弟子たち三十余人と、顕真法印一門の碩学や大原の聖たちが列座し一昼夜の問答が在りました。

法然上人は、南都奈良や天台・真言・佛心(禅)の諸宗の教えを詳しく述べて「これらの宗派の教えは深く利益も優れているが、私のような愚か者は、その教えに堪える器ではないので、悟ることは難しく惑い易い。今は末世となって人は愚かになり、能力と教えとが背き合っているからです。阿弥陀仏の願力を強い縁とするので、智慧のあるなしを問題とせず、戒

律を守るか否かを選ばず、煩惱も消滅変化もない浄土に生まれ永久に後戻りしない位に達するのは、ただ浄土門だけ、念仏の一行だけです」と強調し、最後に「これは私なりの理解を述べたまでであり、優れた方の理解や修行を妨げようとするのはない」と表明しました。法印はじめすべての聴衆が法然上人を信じ従い、皆で声を揃えての念仏が堂内に響き、信心を発し縁を結ぶ人が多くいました(『行状絵図』第十四卷)——法然上人は「機根比べには源空勝ちたり」と述懐しています。

②南都学匠宗徒への『浄土三部経講説』

俊乗房重源は、南都奈良の僧侶や信者に念仏のすばらしさを説き、人々に阿弥陀仏への信心を勧めようとして、文治六(一一九〇)年に東大寺大佛殿改修中の軒下に五十八歳の法然上人を招いて「浄土三部経」講説を依頼しました。会場には、南都奈良仏教の大学者に加えて二百人余りの僧達が高座の脇に座って、自宗の教えへの誤り等がありはしないかと手ぐすね引いて聴聞していました。

法然上人は、先ず三論宗や法相宗の教義を説き、次に『浄土三部経』に則って浄土宗の教えを詳しく講釈し、「末代の凡夫が迷いの世界から抜け出る大切な教えは口称念仏に超すものはない」と強調し、加えて『観仏三昧経』の教えに随って「もし念仏をあしざまにけなす

者が在れば、無間地獄に墜ちて計り知れない長い苦しみを受けるに違いない」と説きました（『行状絵図』第三十卷）。聴衆の僧たちを始めとして、すべての人がこの上なく喜び感動し信仰心を深めました。

大原問答と東大寺講説では、当時の日本仏教界の天台や南都の仏教へ出向いて所信を講じる法然上人で、自らの信仰よりも教義・教学のレベルにおける立論でした。自らの立教開宗の日本仏教界における正当な提議を意味し、他宗の学匠の面前で所信の言葉を発するという「構え」があります。これら大原問答・東大寺講説は、法然上人にとっては浄土宗立教開宗の開陳と検証であったと言えます。

二、布教・教化の発露（『逆修説法』）

東大寺三部経講説のあと、鎌倉武家勢力台頭の中で後白河法皇（一二二七—一九二）に授戒し、九条兼実への授戒を四回、後白河法皇の往生の善知識を勤め、追善菩提の六時礼讃を諷誦し、宜秋門院任子（一一七三—一二三九）に授戒し、熊谷直実（一二四一—二〇七）の帰依を受けるなどの事がありました。

立教開宗以後二十年になる六十二歳頃（建久五（一一九四）年）に、法然上人の直弟子安

楽房遵西の父で外記禪門師秀は、阿弥陀仏来迎迎接像の開眼供養に合わせて自身の死後における冥福を祈る逆修を行い、法然上人に初七日から六七日に至る六会の説法を懇請しました。法然上人に帰依する篤信の者ゆえに、師秀の求めに寄り添う対機の説法であり、法然上人の御心・本意の一言一言が師秀の心の襞に入り込むがごとき信仰の情調が漂っています。法然上人の「お念仏の功積もる」心情が吐露されています。⁽¹⁾

大原問答や東大寺講説のように、天台や南都の仏教へ出向いて所信を講じるという場合には、法然上人の言葉は自らの信仰よりもむしろ教義・教学のレベルにおける立論が基底にあり、自らの立教開宗の日本仏教界における正当な提議を意味し、一方では他宗の学匠の面前で所信の言葉を発するという「構え」のようなことが予想されます。しかし、この説法は趣きを異にし、例えば「師秀説草」とか「法然上人御説法事」とする資料のように、法然上人が篤信者師秀その人の懇請に答えて発する説法です。説法は待機の説法であり相手の求めに寄り添うごとき情緒が伴うものです。この逆修説法においてより深く法然上人の本意を受けとめることができるのではなからうかと思えます。

ここで、具体的に内容を紹介することはできませんが、この説法には浄土宗の教えの重要な概念が噛み砕かれて懇請者の師秀に差し出されているように述べられていることに注目した

いのです。

特に第三七日「阿弥陀仏の名号の功德と光寿二義」について、法然上人は阿弥陀仏の「名号の功德より勝れたものはない」ということを『無量寿経』説示の十二光仏（無量寿光・無辺光・無礙光・無対光・炎王光・清浄光・歓喜光・智慧光・不断光・難思光・無称光・超日月光）を取り上げます。

そして、「ここに知りぬ、名号の中に光明と寿命との二義を備えたりという事を。かの阿弥陀仏の一功德の中には寿命を本となし、光明勝れたるが故なり」として『昭法全』二四五頁）、名号の中には「迷いの闇を破り真理を照らし出す光明」といふのちを体とする寿命の二義が備わっていることを知りえます。なぜならば、寿命が根本であり光明が勝れているからであると捉えます。法然上人は光明の功德・寿命の功德について、恵心僧都の理解ではなく新羅の憬興の説（『無量寿経連義述文贊』巻中〈『大正藏』第三七卷一五五頁〉）を取り込みながら法然上人自身の念仏相続の体験にもとづく積極的な説き明かしがあります。特に、清浄光・歓喜光・智慧光についての受領には極めて注目すべき説示があります。

清浄光とは「貪りの心のない善根から生まれてきた光」と受領し、「心を至して専らこの阿弥陀仏の名号を念ずれば、かの仏、無量の清浄の光を放ちて、照触撰取したまうが故に、

淫貪・財貪の不浄を除き、無戒破戒の罪愆を滅して、無貪善根の身と成りて、持戒清浄の人と均きなり。」と言い(『昭法全』二四六頁)、念仏によって煩惱(三毒・三垢)のなかの「貪」を滅し持戒清浄の人と均しく成ると説きます。

歡喜光とは「瞋りの心のない善根から生まれた光」と受領し、「専ら念仏を修すれば、かの歡喜光をもって撰取したまう故に、瞋恚の罪を滅して、忍辱の人に同じ。これまた前の清浄光の貪欲の罪を滅するが如し」というように(同右・同頁)、念仏によって煩惱(三毒・三垢)のなかの「瞋」を滅し忍辱の人と同じに成ると説きます。

智慧光とは「愚かさのない善根から生まれた光」と受領し、「しからは無智の念仏者と雖も、かの智慧の光をもって照らして撰取したまう故に、即ち愚痴の愆を滅して、智者と勝劣あることなし」というように(同右・同頁)、念仏によって煩惱(三毒・三垢)のなかの「癡」を滅して智者と勝劣がないと説きます。

もともと十二光仏については、『無量寿経』で説示されているように、「是の光に遇う者は三垢消滅し身意柔軟にして善心生ぜん。」とあります(『聖典』第一卷二二七頁)。十二光仏の光明の働きが照触撰取であり「貪瞋癡の三垢が消滅して身も心も柔軟に成り善き心が生じる」と説示されています。ここには、光明の照触による「煩惱の消滅・身意の柔軟・善心の

生起」、すなわち、そのように成っていくという生成としての積極的な力用ゆえに「撰化」の働きが説き明かされているのです。換言すれば、阿弥陀仏の光明に照らされ触れ撰めとられてお育てを得る(照触撰化)ということです。

このことは、善導が『往生礼讃偈』で第一日没礼讃において「大経に釈迦仏は阿弥陀仏の十二光の名を讃歎して往生を願求せよと勧め給うに依りて」(『浄土』第四卷三三七頁)と述べて十九拜を用いる直前に割註を附して、「釈迦仏及び十方の諸仏は弥陀の光明に十二種の名有ることを讃歎して、普く衆生を勧め給えり。称名礼拝相続不断なれば現世に無量功徳を得て命終の後に定んで往生を得」と言い、続けて「無量寿経に説いて言うが如くは、其れ衆生有りて斯の光に遇う者は三垢消滅し……」と光明歎徳章を紹介していることに依拠していると思われます。すなわち、善導は「現世に無量功徳を得」とし、それを今ここで法然上人は、念仏実践相続によって光明の徳用として求めずしてもたらされる「持戒清浄の人に均し・忍辱(禪定)の人に同じ・智者と勝劣あること無し」へと成っていく生成論として解き明かすのです。

法然上人自らの念仏体験における受領に基づく、この清浄・歓喜・智慧の三つの光に照触撰取されることができなのが口称本願念仏であるということです。口称念仏の相続・継続

によって求めずして阿弥陀仏の光明の働きによって得られるのが、むさば貪る・いか瞋る・おろか癡な^{〴〵}心（煩惱）の者すなわち凡夫が、貪を除き持戒清浄の人と同様に成り、瞋を除き忍辱（禪定）の人と同じに成り、癡を滅して智者と勝劣なく成ることです。

この事は、十五歳で「一得永不失」の大乗円頓戒を授かった法然上人が自らに「相應する法門・堪能なる行」を求めに求めて「一心専念……」に託した念仏相続の体験から受領したことであり、言うところの三学非器の凡夫が念仏を相続・継続することによって、求めずして得ることが出来る「持戒清浄の人に均し・忍辱（禪定）の人に同じ・智者と勝劣あること無し」の確信であると言えるように思います。

換言すれば、念仏申すことによって、実は、戒・定・慧の三学を修するに同等に成りうるという^{〴〵}現益を意味し、そしてさらに、すべてをくまなく照らす常光とともに、念仏の衆生のみが照らされる光明（神通光）によって念仏の衆生は攝取不捨される、すなわち、（阿弥陀仏の西方極楽浄土へ）攝取され捨てられることがないという究極へ至るといふ^{〴〵}当益が力強く受領され語られているということですから。つまり、念仏相続がもたらす^{〴〵}現益と当益であり、法然上人が確信した仏教であったと言えると考えられます。

(1) 浄土宗開宗八〇〇年から今日に至るまでの五十年間、「逆修説法」は歴史・文献研究

によって法然遺文としての重要性と信憑性が指摘されてきた。「逆修説法」を法然上人の立教開宗以後の思想・行実の中に取り込む法然上人理解と研究が求められる。

三、選択本願念仏Ⅱ教・行的根拠の体系（『選択本願念仏集』）

篤信者師秀への逆修説法のあとの法然上人には、関東武者の津戸三郎為守の帰依を受けたり、九条兼実には授戒したり、聖光坊辨長の帰伏入門等がありますが、「建久八年、上人聊か悩み給うこと有りけり。殿下深く御歎き有りけるほどに、いくほど無くて、平癒したまいにけり」と六十五歳の法然上人の悩みと九条兼実の歎きとが『行状絵図』第十一巻で語られ、一方で、「上人、専修正行年を重ね、一心専念功積り給いしかば、遂に口称三昧を発し給いき。生年六十六、建久九年正月七日の別時念仏の間、初めには……、次に……、それより後……、ある時は……。詳しく旨、御自筆の『三昧発得の記』に見えたり」（『行状絵図』第七巻）と記されています。

さらに、「上人の往生」が記されている記事では、法然上人は「およそ、この十余年よりこの方、念仏功積りて、極楽の莊嚴及び仏・菩薩の真身を拝み奉る事、常の事なり。然れど

も、年来は秘して言わず。いま最後に臨めり、かるが故に示す所なり」（同右・第三十七卷）と答えているように、専修念仏の深まりが三昧発得の体験をもたらしていることがわかり、『選択集』撰述の時期に重なることが判明します。

また、「同じく九年正月一日より、草庵にて別請に赴き給わざりければ、藤右衛門尉重經を御使いとして、『浄土の法門、年来教誡を承るといえども、心腑に収め難し。要文を記し給わりて、且つは面談に準え、且つは後の御形見にも備え侍らん』と仰せられければ……」（同右・第十一卷）と、九条兼実の懇望と『選択集』撰述状況とが語られています。このように、法然上人の生涯に於いて、建久八年の体調不良から建久九年正月からの別時念仏による三昧発得のこと、そして『選択集』撰述の機縁には、特に注目すべきです。

『選択集』撰述は、特定の弟子たちの役割によって構成された現場があります。法然上人の口述を筆記する役や経論釈の引用検証などの作業担当が予想され、各章は経・論・釈の引用部分と口述者法然上人自身の私（解）釈部分とが区分される構成です。私釈段においては「問いて曰く、答えて曰く……、まさに知るべし」という明瞭な論調で貫かれています。『選択集』は、言わば、経論釈を規範として先導しながら、自らの対話的「ことば」が孕み持つ「主体的な存在の家郷性」を発揮する法然仏教の真実が脈動しています。

その点で、例えば、曹洞宗祖道元が独坐独考して残した『正法眼蔵』や浄土真宗祖親鸞が六十歳半ばから執筆し始め九十歳近くまで手元に置いて独り推敲改稿した『教行信証』とは異なる、法然の仏教理解の姿勢とその表明があることを強調したいものです。

それゆえに加えて注目すべきは、四十三歳で確信した捨聖帰浄、すなわち立教開宗以後から『選択集』撰述までの二十三年間を自行化他の念仏一行にすべて託してきた法然上人の「念仏の功積る」体験と建久八年から九年にかけての行実を組み込みながら、我われは『選択集』の理解に資する必要があることとなります。

『選択本願念仏集』は、全仏教の経・論・釈から「三学の器に非ざる凡夫が『我が心に相應する法門・我が身に堪能なる行』」こそが選択本願念仏であるという、法然上人の宣言表明です。その内容は十六章段から組成されており、右に述べたような法然上人の「一心専念弥陀名号……」に託す念仏の功積る念仏体験のなかで、体系的に理路を重ねて論じられていることを強調すべきです。選択本願念仏の内実は「三仏・四経」を根拠とする八種選択であることに注目すれば、まさにその点に法然仏教成立の揺るぎなき根底があるのです。

最終の第十六章段は「釈迦如来は弥陀の名号を以て慇懃に舍利弗等に付属し給うの文」であり、二つの引用文は『阿弥陀経』の流通分の「仏が此の経を説き已わりたまうに舍利弗等

の対告衆は仏の所説を聞き歡喜して信受して礼し去って行ったこと」(取意)と善導『法事讚』の「五濁増の時に疑謗多く、方便破壊して競って怨を生じ、頓教を毀滅して長く沈淪せん。大衆同心に皆な所有の破法罪の因縁を懺悔せよ」(取意)とです。

この二つの引文は法然上人自身の深く凝縮された思いが込められていると思われます。それは善導が捉えてやまない五濁悪増幅の疑謗・方便破壊・頓教毀滅に長く沈淪の時機に、釈迦如来が弥陀の名号を説き示し与えて下さったことを喜び信じ受ける教えが説かれたということへの思いです。その教えの真実が「選択本願念仏」であり、五濁悪が増幅してやまない時機の凡夫を憐れみ、弥陀・釈迦・諸仏そして浄土の三部經を貫く「弥陀如来の本願」の称名念仏が差し出されたということです。まさに『阿弥陀經』が最後に残す「聞仏所説歡喜信受」は法然上人自身が救われる教えを歡喜し信受するその人であったと言えないでしょうか。

その教えの真実は、三仏(弥陀・釈迦・諸仏)同心による四經(無量壽經・觀無量壽經・阿弥陀經・般舟三昧經)が説く八種選択(選択本願・選択讚歎・選択留教・選択攝取・選択化讚・選択付属・選択我名・選択證誠)の仏意であること、加えて、『觀經疏』こそが弥陀の直説であり善導大師こそが弥陀の化身であり、「徧依善導一師」と明言します。その選択の綱格において、弥陀の選択本願念仏が屹立することになるのです。

つまり、法然上人の用いる「選択本願念仏」は、仏説として残された經典類と弥陀・釈迦・諸仏が同心に「衆生凡夫の浄土往生」のためにこそ、阿弥陀仏の力強く働き通しに働き注ぐお慈悲にほかならなのです。この本願念仏の屹立については、すでに五十八歳の東大寺三部経講説『無量寿経釈』で「凡そ四十八願皆な本願なりと雖も殊に念仏を以て往生の規となす。故に善導釈して曰く弘誓多門にして四十八なれども偏に念仏を標て最も親と為す。人能く仏を念ずれば、仏還りて念じ給う。専心に仏を想えば仏は人を知り給う」(『昭法全』九五頁)と述べており、第十八念仏往生の願を王本願と呼称しています。

『選択集』の本意は、劈頭において喝破される「南無阿弥陀仏 往生之業念仏為先」の十四个字によって、教・行の骨髓が示されています。読む者に定言的に本書の真髓を暗示させると言っても過言ではなく、そして、最終章段で「貧道、昔し此の典を被閲し粗ぼ素意を識り、たちどころに余行を捨てて、ここに念仏に帰す。其れより已来、今日に至るまで自行化他唯だ念仏を緯とす」と述懐していることは、法然上人自身が自らの念仏相統する(自行)中で他者への布教・教化(化他)の実践を「緯(こと)(＝吸う息・吐く息、いのち)」にして過ごしたことの述懐として受領したいものです。

四、「一人も捨てず(何時でも・何処でも・誰でも)」の布教・教化、「法然上人御法語」の世界

六十六歳の『選択集』撰述前後からの三昧発得がもたらす聖者性を伴う救済者法然上人の言葉は多様ですが、少なくとも現実を生きる人間の「生き方の問題」を離れません。このことは、すでに指摘したように、法然上人が、①善導の「称名礼拝相続不断ならば、現世に無量の功德を得て命終の後に定んで往生を得」と断言していることに依拠して、②専ら称名すれば「持戒清浄の人に均し・忍辱の人に同じ・智者と勝劣有ること無し」とする弥陀の光明撰化の徳用を説き、③『選択集』第十一章で「念仏の行者をば観音勢至、影と形とのごとく暫らくも捨離せず。余行は爾らず。また念仏する者は命を捨てて已後決定して極楽世界に往生す。余行は不定なり。およそ五種の嘉譽を流え二尊の影護を蒙る。これはこれ現益なり。また浄土に往生して乃至成仏す。これはこれ当益なり」と私釈で解説し「念仏はかくのごとき等の、現当二世始終の両益有り。まさに知るべし」と結語していることよって自明です。念仏の深まりの中で、求めずして三昧発得による浄土感見を得ていた聖者性と共に救済者法然上人の行状すなわち教化活動が拡がるにつれて、天台学徒からの念仏停止の訴えや南都の僧からの批判などが発生します。法然上人は門弟を戒め自らの本懐を貫きます。しかし時

の政治権力者後鳥羽上皇不在の折に、女房二人が別時念仏礼讃会に参じ剃髪出家した出来事が発端で上皇の逆鱗に触れ、その咎が法然上人へ向けられ土佐配流の身となります。ご流罪を「いま事の縁によりて年来の本意を遂げん事、頗る朝恩ともいふべし」（『行状絵図』第十三卷）と受け留めて逆縁を念仏教化とされるのが、我が宗祖法然上人です。

いわゆる法然上人の御法語類は、語る者と聞く者との間合いを場として語られます。その言葉が語る者の体験を淵源とし、相手の心に寄り添い、聞く相手の心の襞に入り込む時に、信仰の真実を伝える教化となるのです。凡夫往生の教行を自らの「順彼仏願故」の体験を通して紡ぎ出される法然上人の言葉とその響きの中に、何時の時代の誰もが住処（すみか）を見つけ出すことが出来ます。

「生き方」へ照射する言葉こそが布教・教化です。具体的には、以下のような今日的視点を設定して『選択集』撰述以後の「自行化他ただ念仏を緯こととす」る教化の一端を御法語の中から管見したいと思えます。

1. 「身体・言葉・心意」について：誠実な心で身体・言葉・思いを働かせよう

「（至誠心というは真実の心なり。その）真実というは、身に振る舞い、口に言い、心に思

わんこと、みな誠の心を具すべき也、すなわち内は虚しくして外は飾る心の無きをいう」
（御消息〈『昭法全』五七七頁〉）

【現代語味読】（至誠の心というのは真実の心です。その）真実というのは、身のふるまいも、言葉を口に発することも、心に思うことも、みな嘘や偽りのない誠実な心をもって行うことです。心で思っていることとは裏腹に、自分をつくらって行動したり言葉を使ったりすることがないことをいいます。（藤本浄彦著『法然』〈創元社〉三四頁）

【資料注】本法語は法然上人のお手紙で、正治二（一一二〇）年に法然上人が授戒した九条兼実の正室への便りではなからうかとも言われています（『翼賛』巻二十二〈『浄全』一六卷三四六頁〉参照）。

2. 「貪欲・瞋恚・愚痴」について…煩惱の虜になる生きざまを振り返ろう

「あるいは炎天に汗をのこいて利養を求め、あるいは妻子眷属に纏まとわれて恩愛の絆を切り難し、あるいは執敵怨類に会いて瞋恚の焰ほむら止むことなし。総すべじてかくのごとくして、昼夜朝暮、行住坐臥、時として止むこと無し」（登山状〈『昭法全』四一七―八頁〉）

【現代語味読】ある人は炎天下の暑さの中で汗を拭いながら富を貪っています。ある人は妻

や子そして兄弟親戚に頼られて情を断ち切れず、ある人は敵や怨みに思う人に出会って、怒りの炎が消えることがあります。およそこのように、人は昼も夜も四六時中、いついかなる場合も、一瞬たりともそうした心が止むことはないのです。(前掲『法然』二二頁)

【資料注】法然上人七十二歳頃に天台宗徒から念仏停止の訴えを受けた折に法然上人が述べた事柄を弟子の聖覚(一一六七—一二三六、藤原澄意の子)が筆記したものは元久法語とも呼称されます。法然上人七十三歳頃の虐病回復のために聖覚が唱導したという説もあります。

3. 「衣服・食事・住居」について…何のために豊かさ・便利・快楽を求めるのか？

「衣食住の三は念仏の助業なり。念仏の助業ならずして、今生のために身を貪求するは、三悪道の業となる。往生極楽のために自身を貪求するは往生の助業となる。よくよくたしなむべし」(禅勝房伝説の詞〈『昭法全』四六二頁〉)

【現代語味読】衣食住の三つは、念仏をとなえるこの身を支えるものなのです。念仏をとなえることの助けとならず、ただこの世を渡すためだけにいたずらに我が身に貪り求めるだけであるならば、それは地獄・餓鬼・畜生の三悪道に陥る行いとなります。極楽に往生する念仏をとなえるために、あれこれと求めてこの身を大切に育てるのであれば、それは往生の

ための助けとなります。よくよく心得ておくべきことです。(前掲『法然』八四頁)

【資料注】禅勝房は一二〇二年に熊谷蓮生の紹介で入門し二年ばかりそばにいる時期は短いが、法然上人はここから信頼を寄せていたらしく、多くの心に沁みる問答が遺されています。

4. 「加齢・疾病・命終」について…念仏して往生を願う生き方を

4-1 ①老(加齢)…加齢は自らの齢が熟していくこと、頼もしく喜びたい

「仏をたのみ往生を志す、これひとえに宿善のしからしむる也。ただ今生の励みにあらず、往生すべき期の至れるなりと頼もしく喜ぶべし。かようの事を、折に従い事に依りて思うべし」(十二箇条の問答『昭法全』六七八頁)

【現代語味読】阿弥陀仏を信じて敬い、阿弥陀仏を頼りにして浄土へ往生することを願うようになるのは、ひとえに前世までに積んできた善行のお陰です。このことは、ただ単にいま生きている時の努力によるだけではなく、往生すべき時期が訪れたのだと強く受けとめて、喜びなさい。このようなことを、折にふれ、事あるごとに思いめぐらすべきです。(前掲

『法然』九八頁)

【資料注】在家の女性からの質問に答えたものと考えられます。示唆に富む法然上人の言葉が見られます。また、晩年入滅する半年ほどの間のブツダの法の旅が若い弟子阿難を同伴して交わされる言葉で「我が齢は熟した(私が加齢していくのは私自身が人間として成熟していくのだ)」とあるのが印象的です(『ブツダ最後の旅』(大般涅槃經) 岩波文庫)。

4―②病(疾病)・祈りで病気が治るなら死ぬ人はいません、仏のお陰でこれぐらいですみました
「受くべからん病は、いかなる諸々の仏神に祈るとも、それによるまじきことなり。祈るによりて、病も止み命も延ぶることあれば、誰かは一人として病み死ぬる人あらん。(略)念仏を信じる人は、例えいかなる病を受くれども、皆なこれ宿業なり、これよりも重くこそ受くべきに、仏の御力にてこれ程も受くるなり、とこそは申すことなれ」(浄土宗略抄 〔昭法全〕六〇四頁)

【現代語味読】病気になって、どれほど多くの神や仏にその病気を治してもらえるように祈っても、それによって病気が治ることはありません。神仏に祈ることによって病気が治り命も延びるならば、誰一人として病気になって死ぬ人はいないことになりましたが、そんなことはありえません。(略)念仏を信じて念仏をとなえる人は、たとえどのような病気にかかっても、この病気はみな自分の過去からの因縁によるものであると思いなさい。この程度の病気

よりもっと重い病気にかかる場所であったのに、阿弥陀仏の力を頂いてこれぐらいの病気ですんだのだと、受けとめられるものです。(前掲『法然』一〇六頁)

【資料注】本法語は「鎌倉の二位の禅尼につかはすお手紙」であり、源頼朝の内室北条政子へのお便りである。権力ある武士の妻の心得るべき心がけのようなものを述べていると思われず。

4―③死(命終) .. 浄土に参りお会いしましょう

「このたび真に先立たせおわしますにても、また思わずに先立ちまいらせ候事になる、定め無さにて候えども、ついに一仏浄土に参り会いまいらせ候わんことは、疑いなく覚え候」

(正如房へつかわす御文〈『昭法伝』五四七頁〉)

【現代語味読】このたびほんとうに(貴方が)先立たれるにしましても、また思いもかけず私の方が先立つとといったことになりましたも、定めないのがこの世であり、ついに阿弥陀仏のまします浄土に参り、お会いできるのは疑いなしのことなのです。(前掲『法然』一二二頁)

【資料注】本法語は正如房、すなわち出家された後白河法皇の第三皇女で病弱であった式子内親王に宛てた一二〇一年頃のお手紙とされます。病弱な内親王に心を使う法然上人の言葉が特徴的に感受できます。石丸晶子は『式子内親王伝―面影人は法然上人―』(朝日新聞社

一九八七年)を出版しています。

4―④生老病死を貫くもの…人生(生老病死)をトータルで捉えよう

「弥陀の本願を深く信じて、念仏して往生を願う人をば、弥陀仏よりはじめてたてまつりて十方の諸菩薩、観音勢至無数の菩薩の人を圍繞して、行住坐臥、昼夜を嫌わず影のごとくに添いて、諸々の煩惱をなす悪鬼悪神の便りを払い除きたまいて、現世には横ざまなる煩悩なく安穩にして、命終の時は極楽世界へ迎え給う也」(浄土宗略抄『昭法全』六〇四頁)

【現代語味読】阿弥陀仏の本願を心に深く信じて、念仏をとなくて往生を願う人をこそ、阿弥陀仏をはじめとしてあらゆる菩薩、観音菩薩と勢至菩薩そして無数の菩薩方がお念仏をとなえている人の周りを取り巻いて、どのような場合にも、昼とか夜とかにかかわらず、あたかも日光に照らされて物と影とが離れないように、仏と諸菩薩方が影のように添って、さまざま煩惱を起こす発端となるきっかけを払い除いてくれるので、この世を生きるにあたっても思いもかけない心配事もなく安らかな気持ちで、命が終わる時には、阿弥陀仏が極楽世界へと迎え取って下さいます。(藤本共著『心の痛みの癒し』〈同朋舎〉七八頁)

【資料注】右記4―②と同書簡の言葉。延年転寿と転重軽受、現益(現世で護念される身)と当益(臨終に阿弥陀仏に來迎引接され浄土に往生)、生かされて生きることが話題となってい

るのが特徴的です。

以上のように『選択集』以後とみなされる「法然上人の『ことば』」を抽出してみると、ゴータマ・ブツダ（釈尊）が「生老病死」が孕む課題と「煩惱に揺れ動く」人間の問題に取り組んだことに重なり合う法然上人の法語であることが理解されます。換言すれば、人間の存在の問題を過去・現在・未来を貫く念仏の教行において救い（生きることの意味と解決と価値の付与）をもたらすのが選択本願念仏なのです。まさに法然仏教です。

加えて具体的には、①人間を「身(体)・口(言葉)・(心)意」の三業(働き)で捉えること、②人間の現況は「貪(むさぼり)・瞋(いかり)・痴(おろかさ)」の心(煩惱)が蠢き揺れていること、③人間だれもが「衣・食・住」の生活者であること、④人間の生涯は「老・病・死」の体験であること、これらの四つの話題は、釈尊の時代や八百五十年前の法然上人の時代だけでなく、まさに我われ二十一世紀現代の全人類にとってより一層重要な話題であるように思われてなりません。

おわりに お念佛からはじまる幸せ―法然上人の心と交響する（響き合う）生き方を―

法然上人によって主唱される仏教は、『選択集』において選択本願念仏の体系を組成する最終章段で語る「浄土の教え、時機を叩いて行運に当たり、念仏の行、水月を感じて昇降を得たり」の教行です。時代人心に打てば響く教えであり阿弥陀仏と念仏する私とが感応し道交する仏教であると理解されます。それはまさに、求道の法然上人が模索し求めた「我が心に相応する法門・我が身に堪能なる修行」です。

それが選択本願念仏の教行であり、①過去・現在・未来を貫いて「およそ五種の嘉誉を流え二尊の影護を蒙る。これはこれ現益なり。また浄土に往生して乃至成仏する。これはこれ当益なり」（『選択集』第十一章）とされる現世と来世を貫く念仏利益であり、②「衆生、行を起こして口常に仏を称すれば、仏すなわちこれを聞き給う。身常に仏を礼敬すれば、仏すなわちこれを見給う。心常に仏を念ずれば、仏すなわちこれを知り給う。衆生仏を憶念すれば、仏また衆生を憶念し給う。彼此の三業相い捨離せず」（同右・第二章第七章）と具体的境界をもたらず間柄としての念仏行者と阿弥陀仏との感応し道交する念仏です。重視すべきことは、法然上人は『選択集』の第二章捨離行帰正行篇と第七章光明唯撰念仏行者篇の両章に

において善導『観経疏』散善義深心釈の親・近・増上の三縁釈を引用しているということです。選択本願念仏の仏教は、人心に相應する教えであり念仏する者と阿弥陀仏との感應道交する教行です。法然仏教は、人心に相應する教え・阿弥陀仏との感應道交の念仏行を基とし礎としています。この視点に立って捉えれば、法然以後の祖師は、常に自ら、人心に相應する教え・阿弥陀仏との感應道交の念仏行を基とし礎とし、生活する時代・人心に呼応する言葉で教化し伝承してきたと理解すべきこととなります。まさに「時機相應（時代人心に噛み合う）」で「万機普益（人種・老若・男女を問わず救われる）」です。そして今、私たちは、時代・人心の変化・変容の中で自らの意識・姿勢として、すなわち、宗祖法然上人の立教開宗以来八百五十年の星霜を生きる者の一人として、次のような理解と取り組むを試みてみたいと思います。

1. 法然上人の言葉…「生けらば念仏の功積もり、死ならば浄土へ参りなん。とてもかくても此の身には、思い煩う事ぞ無きと思ひぬれば、死生共に煩いなし」（常に仰せられる御詞〈『昭法全』四六五頁、『行状絵図』第二八巻）

【理解】「念仏の功が積もる」ということは念仏の相續持続によって求めずして獲得できる功

徳のことであり、念仏の功徳を平常の生活の中で積んでいく生き方が、何も不安や煩いのない死、すなわち阿弥陀仏や菩薩の迎えを得ることができるといふ、真なる安心と喜びの確信のなかで生きる意味と意義とをもたらしめます。

⇔

2. 二十一世紀劈頭宣言…「愚者の自覚を、家庭にみ仏の光を、社会に慈しみを、世界に共生を……」

【理解】我が国八十年近く前の戦争体験から現在への道筋の中で、経済・科学・医学などの進歩がもたらす豊かさと平和を現実に体験する二十一世紀は、個人と社会という両極的現象において諸種の状況を惹起してきました。複雑な社会的現象に向けて、法然上人のみ教えを心として生き抜くことが「念仏申すこと」において整い方向づけされる。「個人から家庭へ、家庭から社会へ、社会から世界へ」という道筋が「愚者の自覚↓み仏の光↓慈しみ↓共生」へと繋がりゆくお念仏です。

⇔

3. 開宗八百五十年キャッチ・コピー…「お念佛からはじまる幸せ」

【理解】選択本願の称名念仏は、過去・現在・未来を貫き、個々の「愚者の自覚」を根茎に

して「家庭」へ「社会生活」へ「世界の共生(ともいき)」へと脈打つ展望を具現化する中心軸です。それゆえに、様々な幸福論が乱立する廿一世紀中葉を迎えようとする現代の風潮において、法然上人の念仏に縁ある一人一人が、実地にお念仏することによって、現世における幸せと来世に迎える幸せ(浄土往生)へと導かれ味わう「お念佛からはじまる幸せ」の生活を送ることができるのです。

付記・本稿は既に発表した論文・講述を再編成したものであり、引用文はできるだけ現代文に改めた。(令和五年十月廿五日脱稿)

あとがき

二〇二四年、浄土宗開宗八百五十年御正当の記念すべき年、令和六年度の『布教羅針盤』が発刊となりました。教師各位におかれましては、開宗八百五十年を念頭に置きながらそれぞれの状況で、日々の念仏教化また布教活動に取り組まれていることと存じます。

今回は令和五年度の「法然上人の求道から立教開宗までのあゆみ」に続いて「法然上人の立教開宗以後のあゆみ」と題しての編集方針にもとづき進めてまいりました。

この『布教羅針盤』では、わかり易い内容であることと、日々の布教教化の様々な場面で役立てていただけることを主眼に、御門主猊下の教諭を根底に布教専門部会において検討編集を進めてまいりました。

大本山金戒光明寺法主藤本浄彦台下には、「学びを深めるために」と題し、法然上人の立教開宗以後の布教教化、また開宗後の法然上人の動向について、詳細かつ順序立てられてご教示をいただいています。そして布教教化の経験豊富な福井教区大門俊正上人には「布教講義」として「求め、願い、そしてあこがれて行く」のテーマで「なぜ極楽か、何のために念仏をとるのか」という基本事項を丁寧にお示しいただきました。さらに全国四地区から布教の最前線でご活躍の上人方にそれぞれのテーマに沿って布教実例を執筆いただき、教師各位には伝えるという点からも大いに参考にして頂ければと存

じます。

昨年度の『布教羅針盤』「法然上人の求道から立教開宗までのあゆみ」と今年度の「法然上人の立教開宗以後のあゆみ」は前・後篇の体裁をとり、開宗八百五十年に合わせた時機相応の学びと捉えていただき、法然上人のご生涯と選択本願念仏のみ教えを受け取られ、お取次ぎいただければと存じます。

現今実生活にはあらゆる情報が氾濫し、求めればいとも簡単に欲しい情報が得られます。その反面あまりにも膨大な情報やフェイクニュースなども出回り、情報に振り回され心の平穩が失われることもあります。

このような状況下であるからこそ法然上人の選択本願念仏のみ教えを、この『布教羅針盤』を指針として有縁の方々には正しく伝え、念仏相続することにより安穩にお過ごしただくことが、浄土宗教師としての使命であると存じます。

開宗八百五十年の勝縁に南無阿弥陀仏の声が響きわたることを念願致します。

至心合掌

令和六年四月一日

布教師専門部会 池田常臣 城平賢宏 郡嶋泰威 北山大超 安達俊英 安永宏史

令和6年度 布教羅針盤
開宗850年を迎えて（後篇）
～法然上人の立教開宗以後のあゆみ～

令和6年4月1日 発行

発 行 浄 土 宗

〒605-0062 京都市東山区林下町 400-8
TEL (075) 525-2200(代)
FAX (075) 531-5105

〒105-0011 東京都港区芝公園 4-7-4
TEL (03) 3436-3351(代)
FAX (03) 3434-0744

発 行 人 川 中 光 教

監 修 教育学事審議会
布教専門部会

編 集 浄土宗教学部

印 刷 (株)共立社印刷所

表紙デザイン 辻 聡

浄土宗宗務庁

©Jodo Shu, 2024 Printed in Japan
<https://jodo.or.jp/>



净土宗